

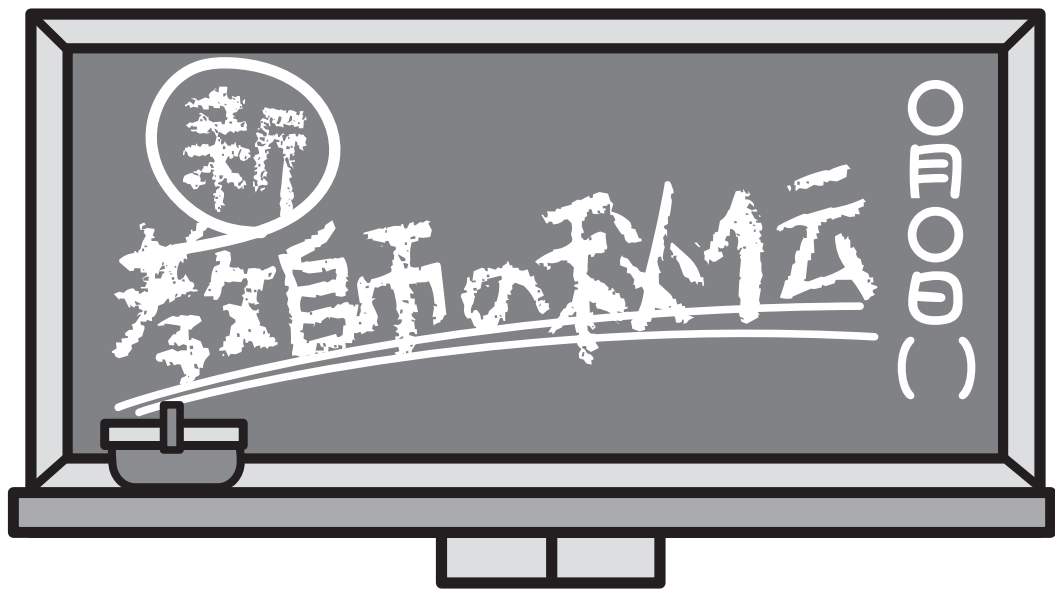
新

教師の秘伝

「主体的・対話的で深い学びの実現」

心／新計





主体的・対話的で深い学びの実現

—資質・能力を育成する主体的・対話的で深い学びの実現—

新・教師の秘伝は、主体的・対話的で深い学びを実現するための基盤をつくります。どの学校・どの先生でも『実現可能な具体的な手立て』を示しています。新・教師の秘伝の内容をよく理解して、一つ一つの手立ての目的を意識しながら根気よく取り組むことで、主体的・対話的で深い学びの実現に一步一步近づいていくはずです。

また、新学習指導要領を実現するためには、学校として「共通性と一貫性のある取組」を実践して「資質・能力の育成を積み重ねる」ことが必要です。教師の秘伝を学校全体で活用することで「主体的・対話的で深い学びを実践して資質・能力を育成する教育」を積み重ねることが可能になります。

新学習指導要領は主体的・対話的で深い学びを実現して「概念化された知識・技能の習得」、「思考力・判断力・表現力等の汎用的な能力の育成」、「人とのかかわりながら自己を高めていくための非認知的な能力の育成」をめざします。

資質・能力を育成する主体的・対話的で深い学びは「グループ活動」を取り入れたり、特定の「学習の型」を取り入れたりすれば成立するというものではありません。当然、教師の秘伝は特定の型を深い学びとしていません。

全員が授業に参加して個別の多様な見方・考え方が生かされる「対話」と「相互作用」によって、課題に対する概念を形成していく過程が、資質・能力の育成を可能にします。一人一人の「かかわり方」が学習の深まりを左右するのです。したがって、一部の子供だけが活躍する学習に陥ってしまわないことが大切です。

個人差や能力差にかかわらず、一人一人が集団の中で受け入れられ認められることで、力を発揮することが可能になります。「一人も見捨てられない教育」を実現して、すべての子が大人になったときに、よりよい社会を形成し、よりよい人生を送れるようにすることが教育の重要な役割だと考えます。



教師の秘伝の使い方

最初に新・教師の秘伝全体に目を通して、概要を理解してください。次に、P.23にある掲示物を作り「2. 話し合いができる集団づくりの手順」で練習を開始します。P.26の全員挙手のために「待つ」は常に意識してください。P.28の課題例を参考に「課題を自分で考え」て、楽しく話し合いの練習をします。その時には、P.45とP.46の教師の働きかけも実践してください。そうして、P.36とP.37を参考に学習内容と実態に合う「課題を自分で考え」て、話し合いの授業に取り組んでください。

1. 話し合いを成立させる「6つの手立て」

「6つの手立て」を取ることが目的ではなく、手立ての目的を理解して実践することの大切さを説明しています。「6つの手立て」の目的を達成する別の手立てがあれば、実態に合った手立てをとることも考えられます。型から入りますが、いつまでも型にこだわる必要はないことも説明しています。

2. 話し合いができる集団づくりの手順

最初に練習方法を記述しました。「話し合いが楽しい」ことを体験させながら練習して、「対話」と「相互作用」で学べるようにしてください。

3. 課題をどうするか

話し合いの練習の段階では、課題によって話し合いが成立するかどうか大きく左右されます。課題の解説を参考に、どんな課題が自分の学級の実態に合うか考えて活用してください。

4. 話し合いの進め方

話し合いの進め方はいろいろあります。これが一番というものはありません。最初は、秘伝を参考に実践を積み重ね、最終的には自分なりの進め方ができるようにしてください。

5. 主体的・対話的で深い学びの「深い学び」の実現

最初から話し合いの深まりを求めるのは困難です。継続的に取り組むことで先が見えてきます。但し、どんなに話し合いが深まっても一部の子だけが話し合いに参加して、他の子は集中していないということでは授業が成立していないと思ってください。

6. 単元をつくる

これからは、1時間の授業の流れを重点的に考えるだけでなく、「資質・能力を育成する単元の構成」をする力をつけることが大切です。手立てとして、児童の経験や実生活・実社会との関連を図った単元の構成について解説してあります。

7. 3つの視点からの集団

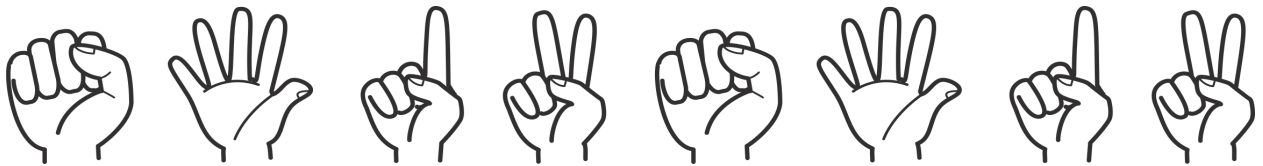
「思考力等の認知的な能力」や「社会スキル・人間性等の非認知的な能力」の基盤になる資質・能力を養うことができる集団づくりについて解説しています。

8. 個性が輝く集団づくり

能力差・個人差を受け入れるための具体的な手立てを解説しています。一つの方法として活用してください。

新教師の秘伝 もくじ

資質・能力を育成する主体的・対話的で深い学びの実現	2
新・教師の秘伝の使い方	3
もくじ	4
1. 話し合いを成立させる6つの手立て	6
①全員挙手	8
②ハンドサイン	10
③相互指名	12
④発言の仕方	14
⑤聴き方	16
⑥人とのかわり	18
6つの手立ての定着	20
2. 話し合いができる集団づくりの手順	22
①話し合いができる集団づくりの手順	23
②発言の仕方の練習	24
③全員挙手の練習	26
④発言しやすい課題で話し合いの練習	28
3. 課題をどうするか	30
①5つの課題	31
②学習課題の例	36
4. 話し合いの進め方	38
①話し合いの学習過程の例	39
②自分たちで課題解決の話し合いができる集団づくり	40
③4つの話し合いの進め方	41



④話し合いを進めるときの教師の働きかけ	45
⑤話し合うときの教師の留意点	47
⑥6つの手立て+二項対立の課題	48
5. 主体的・対話的な深い学びの実現	49
①深い学びの実現	50
②論理的な思考力の大切さ	55
③論理的な思考力とは	56
④資質・能力の育成を大切にした授業	60
⑤育成する資質能力とは	61
⑥対話と相互作用を大切にした授業	62
⑦対話と相互作用を大切にした集団づくり	63
6. 単元をつくる	64
①単元をつくる	65
7. 3つの視点からの集団づくり	66
①3つの視点からの集団づくりとは	67
②全員が参加して主体的に学べる集団	68
③話し合いで主体的に考えを深めていく集団	69
④規範がありだれでも安心して過ごせる集団	70
8. 個性が輝く集団づくり	71
①生活の問題解決の話し合い	72
②『個性が輝く』集団づくり	74
9. 質問コーナー	76
10. 教師の秘伝ホームページ	78
11. 終わりに	79

1

話し合いを成立させる6つの手立て

話し合いを成立させるための『6つの手立て』を挙げました。

- ① 全員が主体的に授業に参加するための『全員挙手』
- ② 思考を連続させるための『ハンドサイン』
- ③ 自分達で授業を作り上げていくための『相互指名』
- ④ 発言力を高めるための『発言の仕方』
- ⑤ 考えながら聴く、発言しやすくするための『聴き方』
- ⑥ 人とのかかわりで学ぶ力をつけるための『人とのかかわり』

以上の6つの手立ての目的を深く理解して、継続することが
「話し合いが成立する集団」づくりの近道です。

最初は、学校全体で『共通の手立て』で取り組むことが大切です。それで、悩みや成果を共有して、次の一步へ進むことができるのです。チーム学校も自然に成立します。ただし、上記の手立てと同様の目的が達成できる別の方法があれば、それを『共通の手立て』としても支障はありません。手立ての目的をしっかりと把握しておくことと『共通の手立て』とすることが重要です。

新学習指導要領は「主体的・対話的で深い学び」を通して「資質・能力」を育成することに重点を置いています。

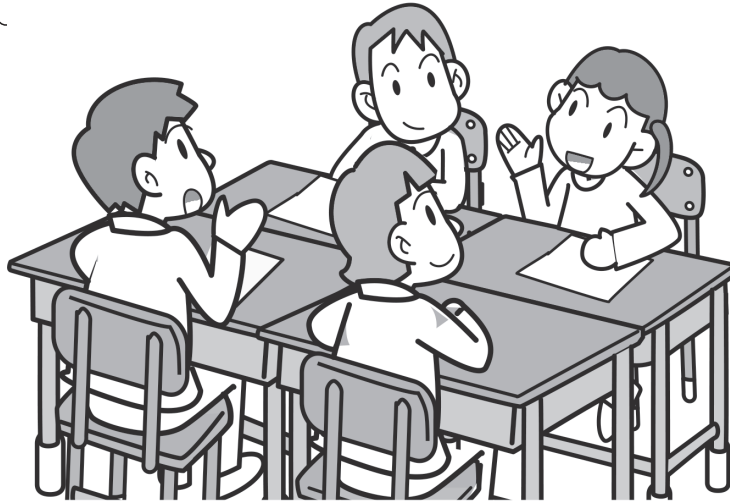
実現するためには『話し合いが成立する』具体的な手立てが必要です。



Q「具体的な手立て」とは、何をすればよいのですか？

まず最初に、以下の「6つの具体的な手立て」を実践して、話し合う力を身に付けさせることです。

A



① 全員挙手

全員が主体的に参加する授業をめざすため

② ハンドサイン

思考力を養うために



③ 相互指名

自分たちで授業を作り上げるために

④ 発言の仕方

発言力を高めるために

⑤ 聴き方

考えながら聴くために

⑥ 人とのかわり

教える 教わる 支える
支えられる

日々の学習を通して、これらが身につけば、課題解決の話し合いは成立します。

Q ① 全員挙手、②ハンドサイン、③相互指名、④発言の仕方、⑤聴き方、⑥人とのかわりは、どう指導すればよいのでしょうか？

「①全員挙手」から説明していきます。

A

①

全員挙手

一人も見捨てることなく、全員が主体的に授業に参加できる手立てが「全員挙手」をめざすことです。

全員挙手

目的

みんなが主体的に
授業に参加

習得の授業

発問したら全員が手を挙げるまで待つ。分からない子は、教えてもらう。

『途中までの発言でもよい』『丸ごと教わって発言してもよい』

Q まったく分からなくて挙手できない子もいます。その子は丸ごと教わってもよいとなっていますが学習になるのでしょうか？

発言を続けているうちに「自分の言葉で発言」したり、「自分の考えを発言」したりできるようになります。その子に応じた発言の仕方を認め、発展させることが望ましいのです。

A

Q 教師にとって大切なことは？

聴くこと・待つこと

教師が発問をしたら、「全員挙手」するまで待ちます。挙手できない子がいるときは、「教えたり教わったりすること」を教えます。

A

「全員挙手」は1人も見捨てないということですね。

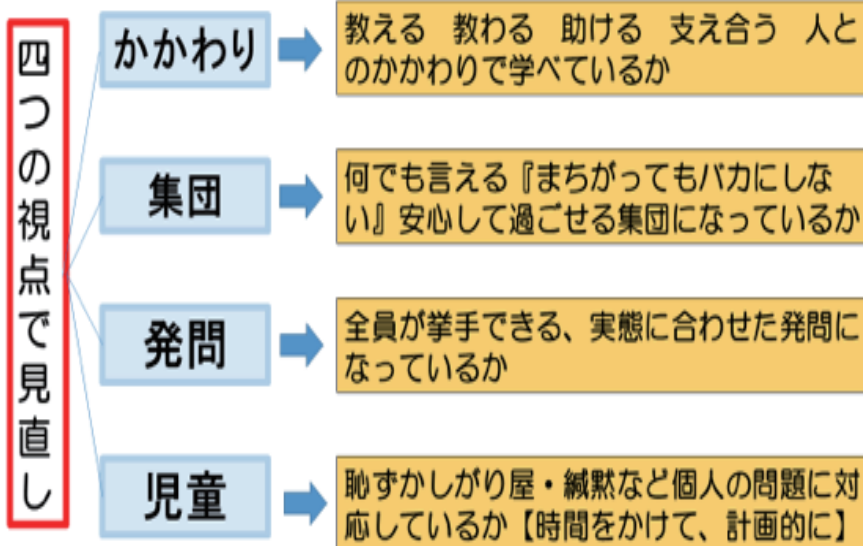
Q それでも「挙手できない子」がいるときは、無理やり手を挙げさせるのですか？

みんなで良くなることが大切という価値観を、クラスにつくることが大切です。よりよい人とのかわりかで学べる集団づくりの基本です。

A

挙手できない子がいるときは、無理に挙手させるのではなく、4つの視点から原因を探り、それに応じた手立てをとります。

挙手して発言できない子がいるとき



個人的な問題で「挙手できない子」は無理に挙手させるのではなく、その子に応じた段階的な働きかけをします。

発言できなくても良いと教師が考えていたらどうですか？

あの子は深く考えているんだから 無理して手を挙げて発言できなくてもいいと思いますよ！



でも！



何を考えているか
実際は分からない

発言している子だけ
伸びていく

できないままで
見捨てられていく

だまっているだけでは 人とのかかわりは学べない

対話で新たな考えを作り出す力は
将来社会で求められるのに…

対話的な学びが重視されるので、全員に発言して学べる力をつけることが大切です。

みんなが手を挙げて学べるようにすることが、話し合いが成立する集団にするための条件です。

②

ハンドサイン

ハンドサイン

目的

思考を連続させる



反対



同じ・その他



質問



つけ足し

自分の考えと他の発言をつなげていくことに慣れる

Q どうしてハンドサインを使うと「思考」することになるのですか？

思考は比較することから始まります。「前の発言」と「自分の考え」を比較することが思考の始まりなのです。

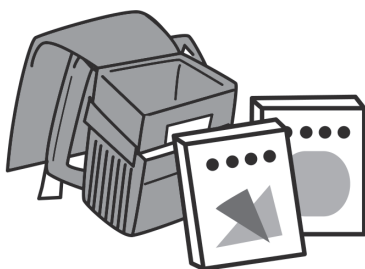
前の発言と自分の考えが「同じ」なのか・「反対」のなのか・「補足」したいのか・「質問」したいのか比較（思考）して、挙手するのが「ハンドサイン」です。

A

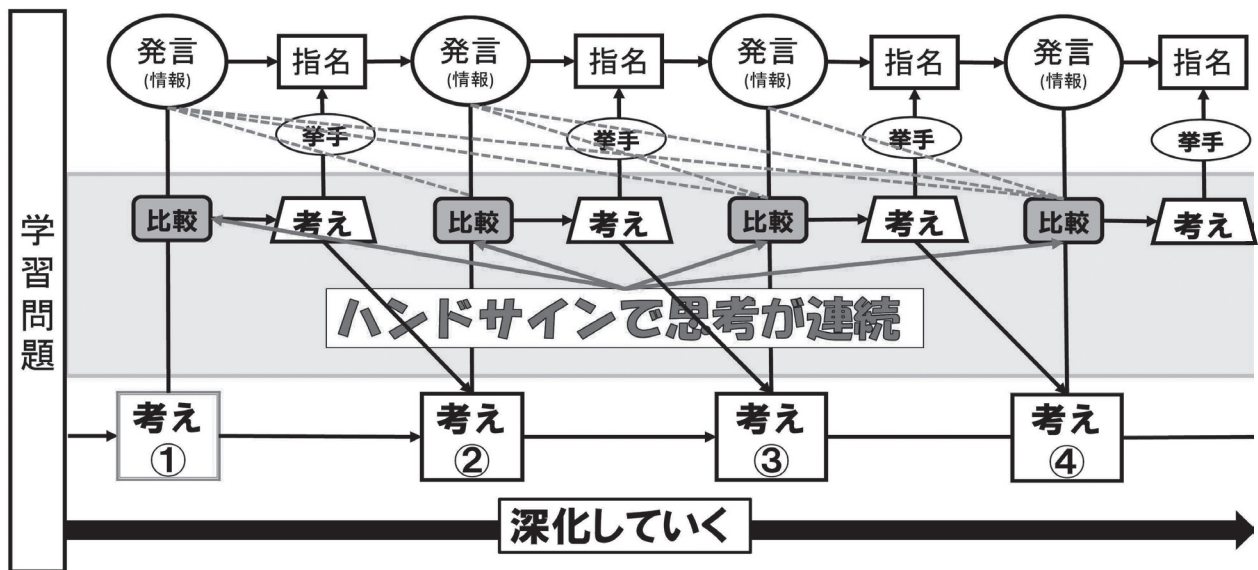
Q どうしてハンドサインで「思考が連続」するのですか？

だれかが発言するたびに、自分の考えと比較（思考）してから挙手することになるからです。

A



なぜハンドサインは思考を連続させるのか



課題に対して、自分の考えを持って、それを発言して終わってしまう授業は、思考力等の汎用的な能力を養うことはできません。

Q どうしてですか？

例えば「空を飛ぶものはなんでしょう？」という課題があったとします。Aさんは「すずめ」、Bさんは「カブトムシ」と思いました。これまでの授業では、Bさんが「カブトムシ」と発言してもAさんは「すずめ」と発言することだけ考えて挙手します。

それに対して、ハンドサインを使う授業は、Bさんが「カブトムシ」と発言したとき、「すずめ」と考えているAさんは、Bさんの「カブトムシ」と自分の考えの「すずめ」を比べます。そして、「羽が生えているという点で共通だから同じ」と判断すれば、ハンドサインでパーを出します。

A

ハンドサインは、一つ一つの発言と自分の考えを比較(思考)するものです。小学校の1年生から、「このように思考すること」を積み重ねていくことで、思考力等の汎用的な能力を育成できるのです。

③

相互指名

③ 相互指名

目的

自分達で授業を作る
(主体的な話し合い)

相互指名の仕方 ①立って発言 ②次の人を指名 ③着席

次の指名は、同じ人にならないように意識する

ハンドサインを意識して次の指名をする

先生の指名は優先する

近くの人でも学級全体に聞こえる声の大きさとで指名する

相互指名は、自分たちの考えをもとに授業を進め、自分たちで授業を作り上げるためのものです。「指名が同じ人にならない」など留意しなければなりません。

A

Q ハンドサインを意識して次の人を指名するとはどういうことですか？

話し合いを深めるために、次の発言は「反対・質問・つけたし・同じ」等の何を選んだほうがよいか考え指名することです。

A

Q 何年生から始めるとよいのですか？

1年生からです。「相手意識を高めること」や「自分たちで授業を進めていくこと」を学びます。

A

Q 自分たちで授業をつくりあげる目的はなんですか？

子供達だけで課題解決の話し合い

目的

学び方や資質・能力がどの程度身に付いているのか確認する

目的

教師としてのかかわり方を見直す

目的

子供達に自信を持たせる

時々、課題解決の話し合いを、子供達だけで取り組ませることで、課題の追究意欲が高まり、話し合いの仕方を身に付ける良い機会ともなります。

A

Q 子供達にとって、とてもよいことですね？

先生にとっても、子供達がどれだけ力をつけたか、何が足りないかなどを判断するよい機会となります。また、話し合いでは、どんな支援が有効かを考える機会にもなります。

A



4

発言の仕方

Q 発言の仕方をどうして決めるのでしょうか？

4 発言の仕方

目的

発言力を高める

(話し合いにみんなが参加できるように)

●●さんにつけたしです
理由は○○○○だからです

●●さんに反対です
理由は○○○だからです

●●さんに質問です
どうして○○○なのですか

○○○です
○○○だと思います

言います！

同じです！

「発言の仕方」に慣れることで子供が発言をしやすくするためです。
また、考えの根拠を発言することを当たり前にして、発言内容の質を
向上させるためです。

A

Q 「発言の仕方」に当てはまらない内容は、かえって発言しにくくなっ
てしまうのではないですか？

確かに「型」に縛られすぎると、発言しにくいこともあります。こだわ
りすぎず、その時々状況判断で効果的に活用しようとするのが
大切です。

例えば、発言するときに「言います」というのがあります。そうする
と低学年では「はい！」と応えます。これは、学校全体の手立てでは
なく、取組の中から自然に発生して、全校に広がりました。

A

Q 発言前にみんなが「言います」と言っていると時間がかかり過ぎるのではないですか？

学年が上がると全員が「言います」と言っているわけではありません。しかし高学年でも「言います」があることで、「発言するための心の準備」をしている子もいます。また、それによって「聴くための心構え」をつくれる子もいます。

このような手立ては、一面的に考えてどうするか決めてしまうのは良くないことです。実態を踏まえて、あくまでも担任が判断するべきです。

A



Q この考え方は、6つの手立てすべてに通じるのですか？

その通りです。「6つの手立て」は、これらの手立てをとることが目的ではありません。それらの「手立ての目的が大切」なのです。型として同じものをいつまでも継続するために行うものでもありません。学級の子供達の実態によってどうすればよいか判断することが重要なのです。

A

5

聴き方

Q 聴き方は、どう指導するのですか？

5 聴き方

目的

**考えながら聴く
発言しやすくする**

聴き方上手

- ①話し手の目を見て聴く。
- ②うなずく。（動作があってもよい）
- ③「あいづち」を声に出す。

①～③を徹底するために教師が見本を示し、辛抱強く定着させていきます



発言や情報を、これまでの知識や経験、価値観、心につなげて受け止め、意味づけして表現する聴き方

「① 話し手の目を見て聴く、②うなずく、③あいづち」の三つを徹底させます。聴き方は、話し合いで最も重要です。

A

Q 発言しやすくするとは、どういうことですか？

話し手が発言しやすくなるということです。聴き手が「①目を見て聴く、②うなずく、③あいづち」の3つをしてくれることで、話し手は、とても話しやすくなるということです。

A

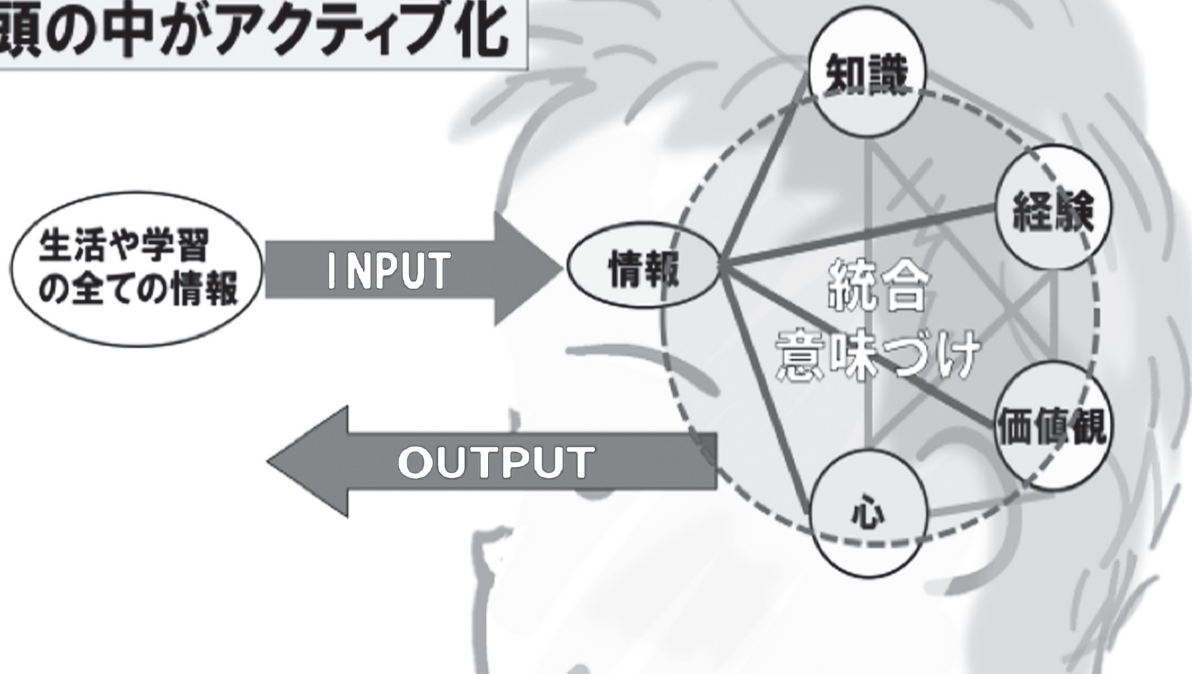


発言が苦手な子にとっても、話しやすくなるということですね。

Q 考えながら聴くとは、どういうことですか？

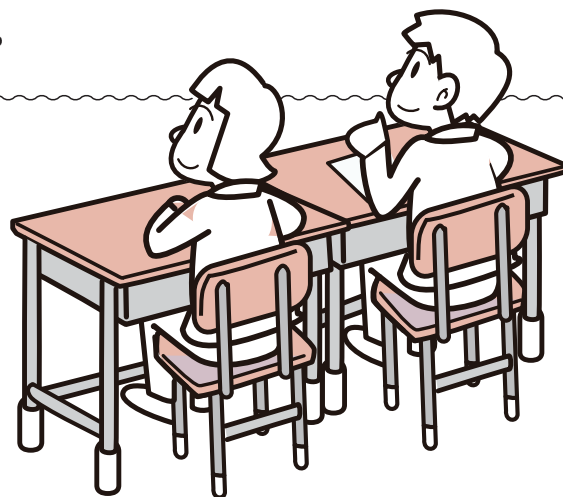
**学習を通して
頭の中がアクティブ化**

知識のネットワーク



入ってきた情報を、自分の知識のネットワークにつなげることです。自分の生活経験や知識、価値観や心に結び付け、新たに意味づけして自分なりの考えを持つことです。

A



Q そうなるとどんな良い点がありますか？

入ってきた情報を自分の頭の中で新たに意味づけして、実生活や実社会において活用できるものにしていきます。転移・応用できる知識や技能となり、汎用的な能力が育ちます。

A

⑥

人とのかかわりで学ぶ

⑥ 人とのかかわり

目的

人とのかかわりで
学ぶ力をつける

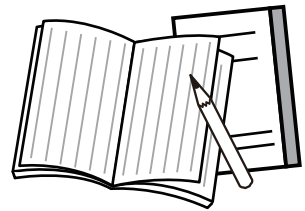
「人を支えること支えられること」
の大切さを実感する。

「教えること」「教えられること」
の大切さを理解する。

「人とのかかわりで学ぶ」良さを実
感する。

「個人の考えを豊かにする」ため
に相談する。

分からなかったら、聴いて教わる。疑問は、質問する。異なる考えには、反対意見を出す。自分の考えを深める行動が大切です。



Q 授業中にはどうすればいいのですか？

分からないとき、人に聴きたいと思ったとき、じっとしているのではなく、行動させることです。

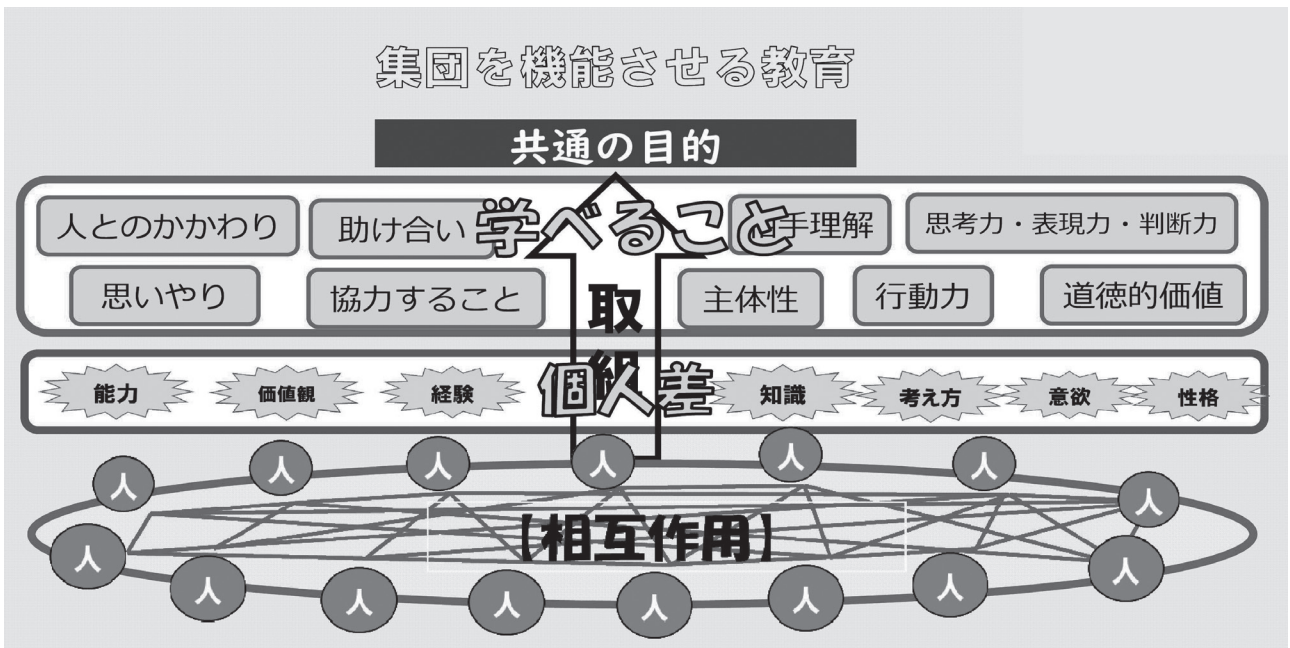
A

Q 教えてもらうために動いてよいのですか？

近くの人に相談したり、教えてもらいに行ったりして良いというルールが必要です。自分だけで分からないのにじっとしていても仕方ありません。自分から行動することが大切です。

最も大切なのは「人に支えられること、人を支えること、人とのかかわり方」の大切さを毎日の授業で学んでいくことです。

A



Q 人との良いかかわりで学べることはたくさんあるのですね。

その通りです。共通の目的に向かってよりよい「対話」と「相互作用」が行われ、子供同士の関係を深めながら、自分達なりにやり遂げることで、思考力等の認知的な能力や社会スキル等の非認知的な能力を育成することができるのです。

共通の目的とは、「学習においては問題解決のための概念を形成していくこと」「特別活動などでは自分達で集会等の計画を立ててやり遂げること」です。学校の教育活動全てに当てはまります。

A

Q 「全ての教育活動で」ですね？

最終的には、人との良いかかわりをつくり、自ら学んでいく力を身に付けることが、これからの時代をよりよく生きることを可能にするのです。

A

人との良いかかわりをつくり
学んでいく力

6つの手立ての定着

「①～⑥までの手立て」を、徹底して身に付けることが、主体的・対話的で深い学びを実現する基盤になります。

毎日・毎時間の積み重ねが必要です。簡単な発問や課題で、練習することが大切です。

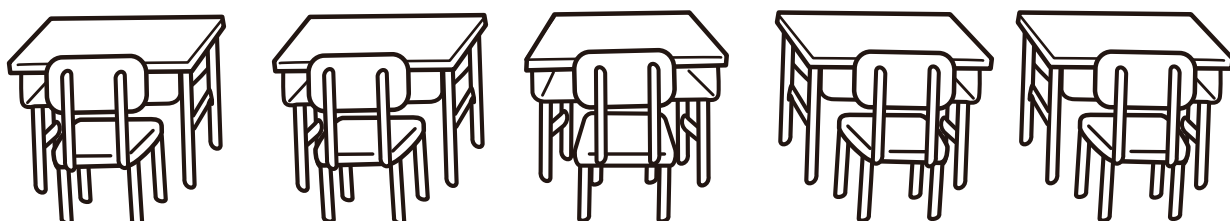
- ①全員挙手の目的は、全員が主体的に授業に参加する
- ②ハンドサインの目的は、思考を連続させる
- ③相互指名の目的は、自分達で授業を作る
- ④発言の仕方の目的は、発言力を高める
- ⑤聴き方の目的は、考えながら聴く、発言しやすくする
- ⑥人とのかかわりは、人とのかかわりで学ぶ力をつける

Q この6つの手立ては、いつまでも続けるのですか？

①～⑥までの手立ては、それぞれの目的があります。目的が達成できていれば、必要ないです。

ハンドサインを例に考えてみます。前の発言と自分の考えを比較することを連続させて、思考力を育成するものです。前の発言と自分の考えを比較して、発言することが定着して自然にできるようになったら、ハンドサインは必要はありません。

A





『中学生』の場合は、いきなりハンドサインをやりましょうというのは、発達段階から難しいと思います。「前の発言と自分の考えを比較して発言できること」が目的ですから、「ハンドサイン」という型にこだわる必要はありません。目的を生徒に説明し、生徒と「実践できる手立て」を考えるのも良いです。

中学生は、6つの手立ての目的を説明し理解させて、自分達に合う手立てを自分達で決めさせる

Q 6つの手立ての目的をしっかりとらえ、学級集団の実態に合わせて、実践するのですね。

そういうことです。型が目的ではありません。最初は共通の手立てとして大切ですが、身に付いたら「形骸化していないか」や「効果が出ているか」見直すことも大切です。

しばらく取り組んだ後、「6つの手立て」の見直しの話し合いをして、自分達で具体的な方法を決めて実践することも、効果を高める手立てとなるかもしれません。

A

いつまでも「共通の手立て」にこだわらない

○手立てに縛られ発言内容が広がらない子
○手立てがあると発言しやすい子



実態に応じて活用し続けるか担任が判断する

2

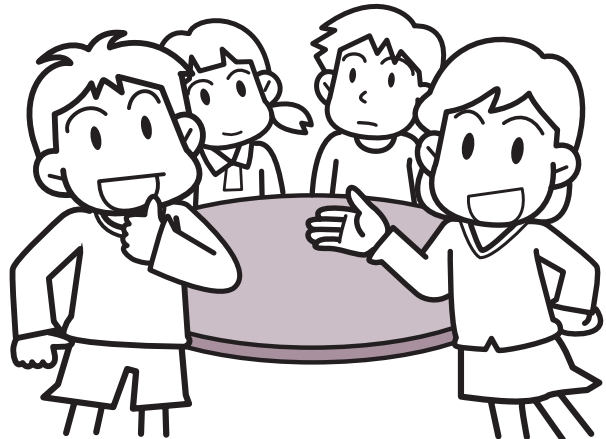
話し合いができる集団づくりの手順

学級集団の話し合いを成立させるためには、話し合いのルールを定着させることが近道になります。

この秘伝にある6つの手立てを活用することを前提に説明します。黒板に「6つの手立て」を分かりやすく掲示して、繰り返し練習することで、子供達が自然にできるようにしていきます。練習を楽しく進めることが「こつ」です。

話し合いを最初から学習に即したものにしておくのではなく、どの子も参加できる課題にするとよいです。そうして、学級集団としての話し合いの進め方を定着させることが、後の「深い学び」につながっていきます。

話し合いのまとめ（課題に対する概念の形成）は、「それぞれの考えが成り立ちますね」というまとめ方や、「一つにまとめていくことで折り合いを付け新たな考えを生み出す」まとめ方があります。どのようなまとめ方にするかは、学習内容と資質・能力育成の視点から判断することが大切です。



①

話し合いができる集団づくりの手順





Q 最初は、練習するのですか？

そうです。黒板に「発言するときの約束」を貼って練習します。

A

黒板

みんなが手をあげられるクラスに

反対
同じ・その他
質問
つけ足し

『〇〇〇です』『〇〇〇だと思います』
 「同じです」
 『●●さんにつけましたです 〇〇〇〇』
 『●●さんに反対です 〇〇〇〇』
 『●●さんに質問です どうして〇〇〇ですか』

先生はみんなが手を挙げるまで待ちます。

相互指名

- ①立って発言する
- ②次の人を指名する
- ③着席する


聴き方上手になろう

話し手の目を見て聴く

うなづく(動作があっても良い)

あいづちを声に出す

分からない人に教える 分からなかったら教わる 気軽に相談する
 『まちがっても気にしないで発言する』『まちがいをばかにしない』



Q 最初は、黒板に『6つの手立て』を掲示するのですね？

そうです。そうして練習すると、みんなが参加できます。

A

Q 練習した後の掲示はどうしますか？

「発言の途中でも全員が見られる場所」に掲示します。慣れるまでは「これを見てね」と促すことも必要です。始めたら定着するまで徹底します。

A

②

発言の仕方の練習

発言の仕方を練習します

1 + 1はいくつでしょうか？

(教師) 間違ってもいいからみんな手を挙げてください

(教師) みんな手を挙げるまで待ってます

(教師) 全員手を挙げたので当てます ○○さん

(教師) 当てられた人は立ってみんなの方向を向いて言ってください

(教師) 聞く人は、話す人の目を見て、聴いていてください

(児童) 2です

(教師) 自分と同じ考えのときは、同じですと答えてください

(児童) 同じです

(教師) わざと間違えてもらいます 3と言ってください

(教師) 当てます ○○さん

(児童) 3です

(教師) ここで挙手しますがハンドサインです グーですね

(教師) 次の人を当ててからすわってください

(児童) ○○さん

(児童) 3です

(児童) 同じです



Q これならできそうですね。

ここで大切なことは、

『発言する子は、多くの級友がいる方向を向く』

『聴き手は、発言する子の目を見る』

『答えが同じときは、全員が「同じです」と声を出す』です。

A

「うなづく」「あいづちを声に出す」指導は、根気よく継続します。
次は、間違うことを気にせず積極的に発言する練習です。間違うことはいけないという意識を、「間違ってもプラス」になるという意識に転換します。

練習します！「間違いもプラスを教える」

「犬、くま、鳥」の中で空を飛ぶものは？

(教師)「犬、くま、鳥」の中で空を飛ぶものは？

→全員挙手するまで待つ

わざと間違えてくれる人？と言って、希望した子を指名する

(児童) くまです

(児童) ハンドサインで【グー】

(教師) わざと間違ってくれた人 次の人を当ててください

(児童) ○○さん

(児童) 鳥です 同じです

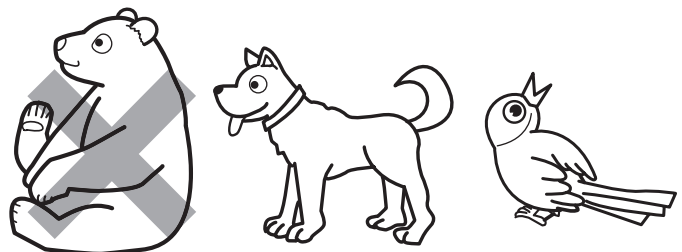
(教師) 今わざと間違えてもらいました

授業で間違えることはいけないことですか？

(教師) よりよい答えに近づくのにプラスになります

恥ずかしいことはありません

このまちがいがあったから、
正しい答えに近づけたね！



Q まちがいにも意義があることを理解させれば、まちがいをばかにしなくなり、発言しやすくなりますね。

授業では、間違った発言をしても、みんなにとってはプラスになることを理解させます。その時は間違いとされても、後には正しいことも世の中にはたくさんあります。また、発明や発見の多くは、失敗から生まれています。いろいろな角度から考えることの大切さを教えることです。

A

③

全員挙手の練習

「全員挙手」は最も基本で、最も重要な手立てです。この取組を始めたら、どの授業でも以下のことは実践しましょう。

全員挙手のために『待つ』

- ① 挙手できない子に教えに行くことを教える
- ② 教えた子を褒める
- ③ 分からないとき、教えてもらいに行くことを教える
- ④ 「分からない」と言えることの大切さを教える
- ⑤ 発言の途中で分からなくなったら交代していいことを教える

Q 途中で発言できなくなったときはどうすればよいですか？

いつでも誰かが代わって助けてくれる『安心感』を定着させておきます。助けることの大切さを全員に理解させます。

A

Q 教えてもらうために立ち歩くと教室が騒がしくなってしまうかわりですか？

騒がしくなりそうなら「目的をしっかりと理解させる」ことです。「分からないのにじっとしている」だけでは、何もできるようになりません。近くの子が教えられない場合もあります。教えに行ったり教わりに行ったりして「人とのかわり方で学ぶこと」が資質・能力の育成につながります。

A

Q 「教えること」「教わること」の大切さを理解させるには、どうすればよいのですか？

教える練習をしましょう。

A

みんなが手を挙げる練習をします！

(教師) みんなが手を挙げて勉強できるための練習をします

(教師) 質問します『カブトムシは空を飛ぶでしょうか』
手を挙げてください

(教師) 手を挙げられない人がいます
どうすればいいのでしょうか？

(児童) 教える

(教師) 立ち歩いてもいいから教えてください

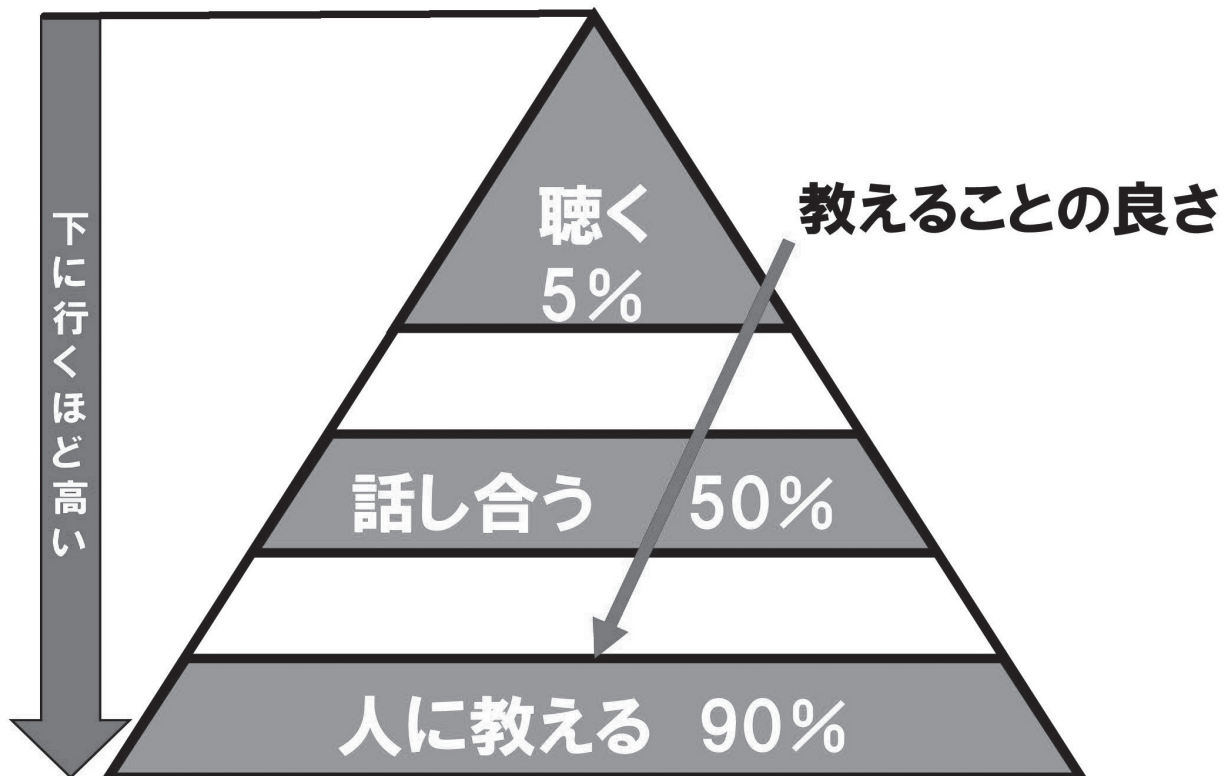
(教師) これでみんなが手を挙げられましたね

(教師) 教えることは、とても勉強になるという話をします

(教師) これはラーニングピラミッドと言います

定着率

ラーニングピラミッド



人に教えたことは90パーセント定着するという考え方があります。他の方法より定着率が高くなっています。これを使って「教えることはとても勉強になるんだよ」と教えることも1つの方法です。

4

発言しやすい課題で話し合いの練習

Q ここまでできたら話し合いですね。

最初から「学習に関する課題」の話し合いは難しいものです。「身近で話しやすい課題」で練習します。

課題は『対立型』にすると発言の動機づけが強くなります。対立型の課題には、いろいろな考えが出しやすくなる良さがあります。

A

話し合いの練習をします！

最初は、対立型の課題で話し合いの練習をします。結論を出すことが目的ではありません。話し合いながら、いろいろな考えを出し合うことで、話し合いの仕方を教えていきます。

課題1 お好み焼きとピザは、どっちがいいか？

課題2 絵と写真はどっちがいいか？

課題3 新聞とテレビではどっちがいいか？

課題4 日本は人口を増やす方がいいか、このまま自然に任せた方がいいか？

Q 「全員挙手、ハンドサイン、相互指名、発言の仕方、聴き方、人のかかわりで学ぶこと」を体験させながら話し合いを進めるのですね。

その通りです。この段階では、課題に対する答え（概念）を作り上げることが目的でなく、気軽に発言することで「話し合いの仕方を学ぶ」、「話し合いの楽しさを体験する」ことが目的です。「質問、つけたし、反対、助ける発言」などの良い発言は、その場ですぐに褒めて、みんながまねするようにします。

A

Q 話し合いの「まとめ」は、どうするのですか？

話し合いの練習では、「定められた答えがない」ものが適しています。いろいろな考えが出されることで練習になるからです。

A

Q 話し合いの「まとめ」はしなくてよいのですか？

いいえそうではありません。まとめる（概念の形成）ことは、話し合いの仕方を学んでいくためにも重要です。

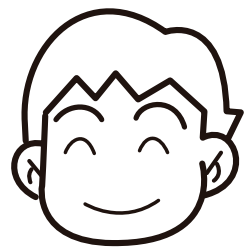
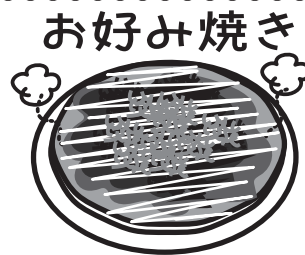
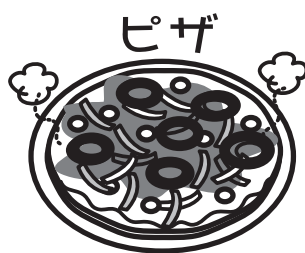
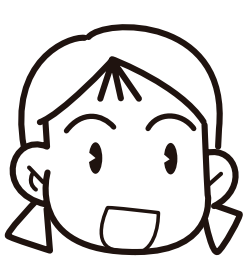
「そろそろみんなの考えをまとめよう」「まとめるための意見を出してください」と働きかけ、まとめる練習をします。

A

Q 対立の課題は「大きく分けると2つの考え方がありますね」、「それらの考え方の中間もありますね」で終わってしまわないですか？

練習では「対立している考えのそれぞれが成り立っている」場合は、それでもよいと思います。課題によりませんが、慣れてきたら、一歩進めて両方の考えを取り入れながら「1つの考えにまとめていく」ことを体験させていきます。

A



Q どうして1つにまとめる必要があるのでしょうか？

「答えのない問題」に立ち向かい、みんなの考えを合わせながら、1つの考えを作り上げていくことで、多様な人が協働しなければならないグローバルな世界で求められる資質・能力を育成できるからです。多様な考えを生かしながら「新たな考えを作り上げる（創造力）」ことも学べるからです。

A

3

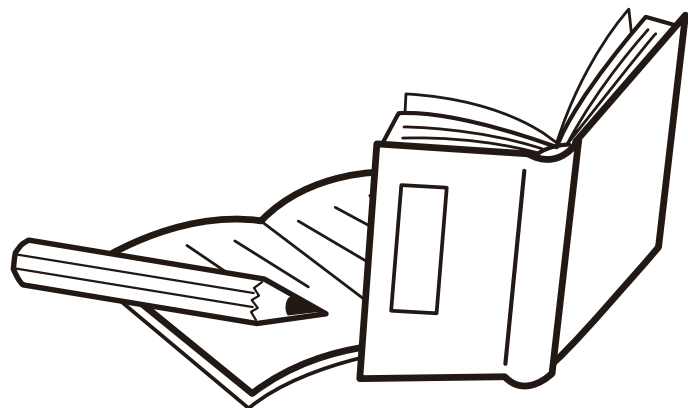
課題をどうするか

この課題を使えば完璧だというものはありません。なぜなら、どれだけ対話と相互作用ができる学級なのかという実態が、その課題を上手に活用できるか左右するからです。自分の学級の今の段階では、このような課題に興味・関心を示して意欲的に追究するというものがあるはずです。ですから、この課題がベストですと提示することとは困難です。

しかしながら、学級集団を課題追究のための話し合いが成立するように鍛えていく段階においては、効果的だと考えられるものもあります。

ここから課題についてのページになりますが、あくまでも鍛えていく段階で有効だと思えるものを例示しているに過ぎないということ为前提に、読み進めてください。

「対話と相互作用で課題に対する概念を形成し、認知的な能力と非認知的な能力を育てる授業」に望ましい「課題」とは何か、教師としてじっくり考えるときも必要です。



①

5つの課題

話し合いが成立する集団づくりには、課題が重要な要素となります。

課題に対して『答えを見つけること』だけが、学習課題解決の話し合いの最終目的ではありません。課題について、多面的・多角的にどこまで広く・深く考えたかが大切です。子供の知識や技能、経験、価値観をもとに解決の取組が出来る課題にすることが大切です。

学んだことを転移・応用できる力、つまり汎用的な能力を養うことも大切です。なごやかな雰囲気、楽しく話し合うことが最も大切です。「既にどこかで習っている子が一般化された知識を発言して終わり」の授業にしてはいけません。

子供の生活経験を生かした話し合いができるようになれば、実生活で役立つ楽しい学習になります。

課題の特徴から、以下のように5つに分けることも考えられます。話し合いが成立する集団づくりをしていく段階では、真ん中の③と④の課題が「話し合いを鍛える課題」として望ましいです。



どんな学習課題(問題)が望ましいか

定められた答えを求める課題

① 「なぜ・どうして～なのだろう」
理由・原因・因果関係等を問いかける課題

② 「〇〇なのにどうして～になるのだろう」
意外性のある課題

話し合いを鍛える課題

③ 「AとBはどちらがいいか」「〇〇をしてよかったか」
二項対立の課題

④ 「〇〇は人々を幸せにしたか」「本当に〇〇になったか」
二項対立を発展させた課題

鍛えられた集団の課題

⑤ 「〇〇について話し合おう」
テーマを示し、考えを出し合う中から生まれる論点について、話し合う課題

Q ①のような「なぜ、●●●●だろうか」という課題は、よく使われると思うのですが、どうして鍛える課題にならないのですか？

①の課題は、ほとんどが「定められた答え」を求めるもので、話し合いになりにくいからです。

A

①「なぜ・どうして～なのだろう」という理由・原因・因果関係等をと問いかける課題

「どうして頼朝は鎌倉に幕府を開いたのか」

「てこを使うとどうして重い物でも持ち上げられるのか」

「なぜ駅の近くには店が多いのか」

既にどこかで習っていたり知っていたりする一部の子供だけが得意そうに発言して終わってしまう課題。一般的な知識が飛び交い、それらが課題に対する答えとしてまとめられる浅い授業が多く見られる。



「知っていること」や「調べたこと」を「そのまま発表」して「まとめる」だけでは、思考力等の資質・能力を養うことはできません。

発言を羅列していく授業は、概念化していく思考過程がないので、生きて働く知識（汎用的に活用できる知識）は獲得できません。

A

Q ②の課題は、意外性があるとおもしろいと思いますが？

②「〇〇なのにどうして～になるのだろう」という意外性のある課題
「〇〇地域では、酪農家の戸数が減っているのに、牛の飼育頭数が増えているのはどうしてか」

理科のブラックボックスも同様に動機づけが強くなる。但し、これを使える内容に限りがあることとパターン化されると動機づけが弱くなってしまう。

②の課題は、①よりも動機づけは強くなります。但し「答え」が決まっています、話し合いの深まりを求めることは難しいです。特徴を理解して、使い分ける必要があります。

A

Q ③の課題は、どうして鍛えるのに適しているのですか？

③二項対立「AとBはどちらがいいか」
「〇〇をしてよかったか」等

「エコ生活をした方がよいか 便利な生活をした方がよいか」
「食糧を確保するため、輸入を増やしたほうがよいか、自給率を増やしたほうがよいか」

発言しやすくなるとともに、自分と異なる考えがあるということが理解できるようになり、自分と異なる考えがあって当たり前という意識になり、異なる考えも受け入れられるようになる。子供たちは話し合いが好きになり、対立が話し合いの原動力になる。

③は、論点が明確で、自分の立場の理由づけを考えながら話し合っていくので、発言しやすくなり、話し合いのおもしろさを体験できます。自分と異なる考えについても、根拠があり、まちがいでないことも理解できます。

A

Q 話し合いのまとめは、どうすればよいのでしょうか？

対立したどちらの考えも成り立つということで収束させることもあります。いつもこれだけでは、課題に対する概念形成として不十分です。対立の話し合いを「一つの考えにまとめる」条件を付けることで、新たな考えを見出したり、折り合いを付けたりして、よりよい考えを作り上げていくことが期待できます。

A



④「〇〇は人々を幸せにしたか」

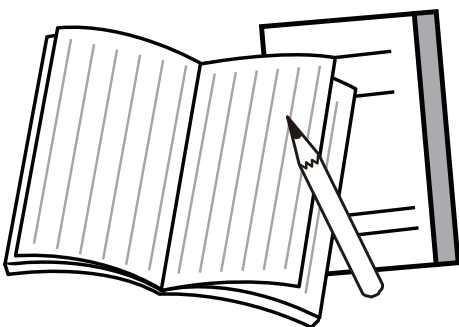
「本当に〇〇になったか」など二項対立を発展させた課題

「大仏造りは当時の人々を幸せにしたか」

「太陽光発電は人々の暮らしをよくするか」

「米作りが始まってくらはしは楽になったか」

話し合いを通して学習に必要な知識を自分の考えに基づいて活用し、自分なりの知識を作り上げていくことができる課題。単に調べて知っていることを発表して終わりではなく、自分の目的に基いて知識を活用しながら、考えを深めていくことを体験させることができる。



④から…

「大仏造りは当時の人たちを幸せにしたか」
についての学習例を図にしました。

「聖武天皇はなぜ大仏を造ったのか」

仏教によって社会の不安をしずめようとした	民衆の不満をやわらげる目的もあった
作った米は税金でふだんの食事は雑草と雑穀飲む雑炊。休みなく働かないといけない。不満をためていた。	国を治める上で、政治と宗教は分けることのできない
災害は政治が悪いことに対する天罰	天然痘とききん
	たいへんな仕事をやり遂げ人々の心を一つにしたい

調べれば分かること

これらの知識を課題解決で『活用』する

立場や人の見方の違いによって全く異なる考え(反対)を持つ。いろいろな考え方があるが、正しい正しくないではなく自分と異なる考えを知って自分の考えを広げる。構成した知識は、これから先に入ってくる情報で変化(深化)する。

調べたことを単に発表するのではなく、それもとにして課題に対する考えを形成することで、自分のものとして活用できる知識を構成します。自分の知識や経験、価値観に照らして考えを統合するので、概念化された知識のやりとりができる話し合いとなって、最終的に課題に対する「概念化された知識を構成する」学習になります。

⑤は、課題に対する自分なりの考えを出し合いながら、考え方などの『ずれ』に着目して、それを論点にして、話し合いを深めていくものです。鍛えられた集団では、この課題が成立します。

⑤「〇〇について話し合おう」話し合うテーマを示して、考えを出し合う中から生まれる論点について話し合い、概念を形成していく課題

「地域の環境について話し合おう」

「信長はどんな人か」

話し合うことで「比叡山を焼き討ちした残酷な人」とか「戦国時代の争いをなくして安定する世の中のもとをつくったすばらしい人」など異なる意見が出ることで、とらえ方の違いが論点になる。信長の業績や時代背景を理解するとともに、見方や立場によって、とらえ方に違いがあることを理解しながら自分なりの信長に対する知識を構成していく。自分達で論点を作ることは、自分たちで問題等に気づいて、追究する態度を養うことにつながる。

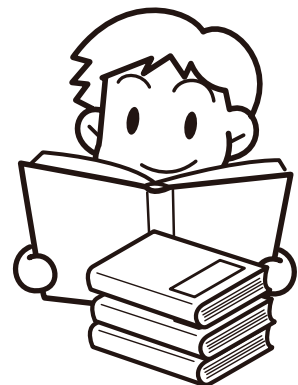
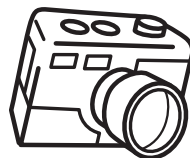
②

学習課題の例

具体的な課題を例示します。これをもとに、先生が自分なりに「よりよい課題」を考えて、試行錯誤しながら実践を重ねましょう。

- 最後にごんは幸せになったのでしょうか。(ごんぎつね 国語)
- ごんは、うなずいたとき、うれしかったのだろうか。
(ごんぎつね 国語)
- 青い煙は何を表わしているのでしょうか。(ごんぎつね 国語)
- 大工さんがおみつさんのことを好きになったのはいつだろうか。
(わらぐつの中の神様 国語)
- 大工さんが、わらぐつを買ったのは、結婚したかったからだろうか。
(わらぐつの中の神様 国語)
- 大工さんは、おみつさんのわらぐつを本当にほしかったのか。
(わらぐつの中の神様 国語)
- せっかくのチャンスなのに、大造じいさんは銃を下ろしてよかったのか。
(大造じいさんとガン 国語)
- 大造じいさんは、残雪を逃がして良かったのか。
(大造じいさんとガン 国語)
- 題名の「海のいのち」とは何か。(海のいのち 国語)
- この説明文が一番伝えたいことはなんだろうか。(国語)
- この物語で、作者は何を伝えたいのだろうか。(国語)
- このお話の題名の意味はなんだろうか。(国語)
- 敬語は必要でしょうか。(国語)
- 聖武天皇が大仏を建立して、世の中はよくなったか。(社会)
- 米作りが始まって、くらしは楽になったか。(社会)
- 日本は、開国して良かったでしょうか。(社会)
- 国会が開かれて、国の力は強くなりましたか。(社会)
- 国会の開設で、民主的な世の中になったか。(社会)

- 源頼朝は、鎌倉に幕府を開いてよかったのでしょうか。(社会)
- 信長・秀吉・家康のだれが天下を治めるのにふさわしいか。(社会)
- 輸入食料品が増えると、得するか損をするか。(社会)
- 明治維新で、国民は幸せになったか。(社会)
- 食糧を確保するため、輸入を増やしたほうがいいのか、自給率を上げたほうがいいのか。(社会)
- お店は、駅の近くにつくった方がよいか。(社会)
- 法案は、国民にとってよいものか。(社会)
- ごみ置き場(収集場所)は、どうやって決めればいいのか。(社会)
- お祭りは、町にとっていいことか。(3年社会)
- 北海道と沖縄では、どっちに住みたいですか。
(どっちで農業をしたいですか)(社会)
- テレビと新聞は、どっちがいいですか。(5年社会)
- これからの日本は、鉄の生産量を増やすことができるだろうか。
(5年社会)
- エコ生活をした方がよいか、便利な生活をした方がよいか。(5年社会)
- 栽培漁業と養殖、どっちがいいか。(5年社会)
- 参勤交代は、やってよかったか。(6年社会)
- 織田信長は、どんな人か。(6年社会)
- 戦国時代で一番活躍したのは、信長と秀吉と家康の誰でしょうか。
(6年社会)
- どのやり方が役に立ちますか?(算数)
- 「最小公倍数」は、生活の中のどんなところで役立ちますか。(5年算数)
- 光電池と乾電池、どっちがいいか。(5年理科)
- 絵と写真は、どっちがよいと思いますか。(図工)

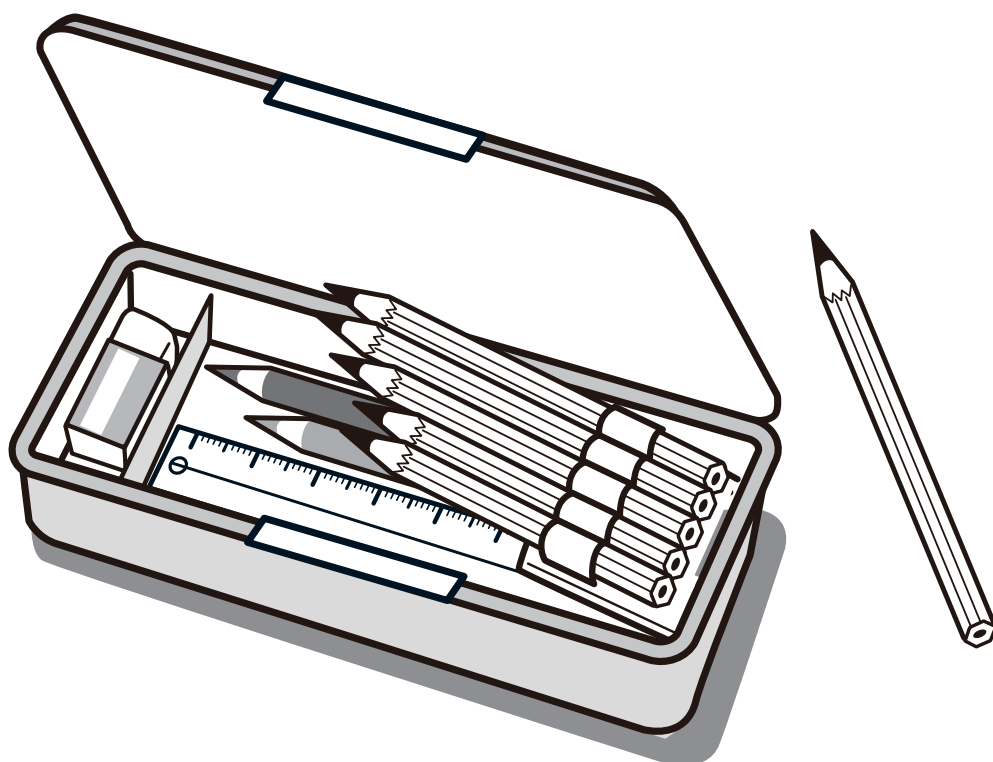


4

話し合いの進め方

話し合いの進め方は、いろいろあります。どの進め方、どの型が深い学びになるとは定まっていません。この学習過程や学習形態をとれば、深い学びになるというものではないということは、教師の経験がある人は分かっていると思います。深い学びの目安は「対話と相互作用によって資質・能力を育成する」ことができているかどうかで判断できると考えます。

ここに例示した進め方でやっていけば、必ず深い学びになるということではありません。6つの手立てや課題の工夫、学習内容、これまでに子供達が身に付けてきた資質・能力、集団としての追究力も関係してきます。このことを踏まえながら、以下の方法を参考に、話し合いが成立する集団づくりをめざしてください。

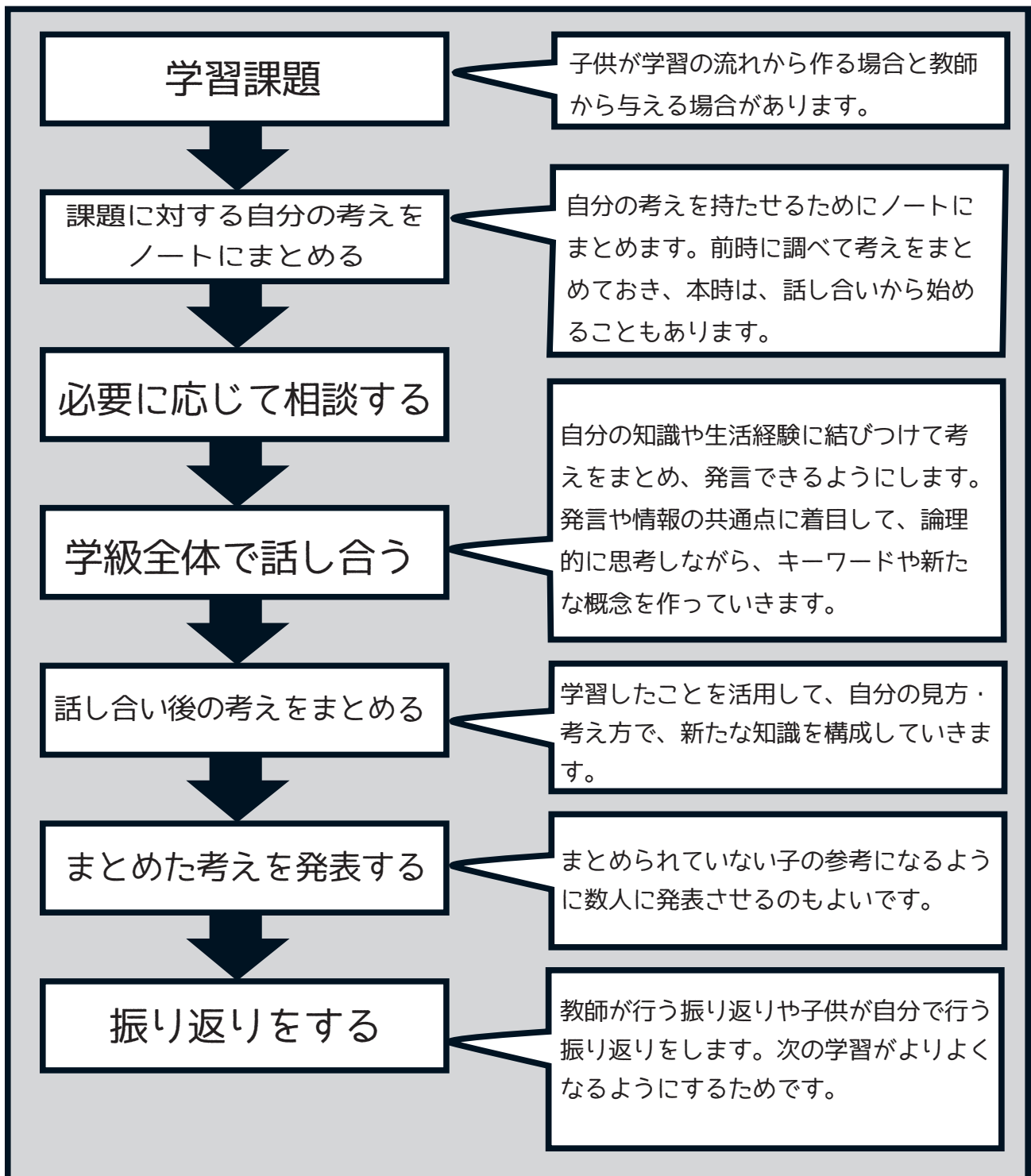


①

話し合いの学習過程の例

国語・社会・算数・理科は、話し合いで「思考力を基盤にした汎用的な能力」を養う「主体的・対話的で深い学び」の実現に適しています。

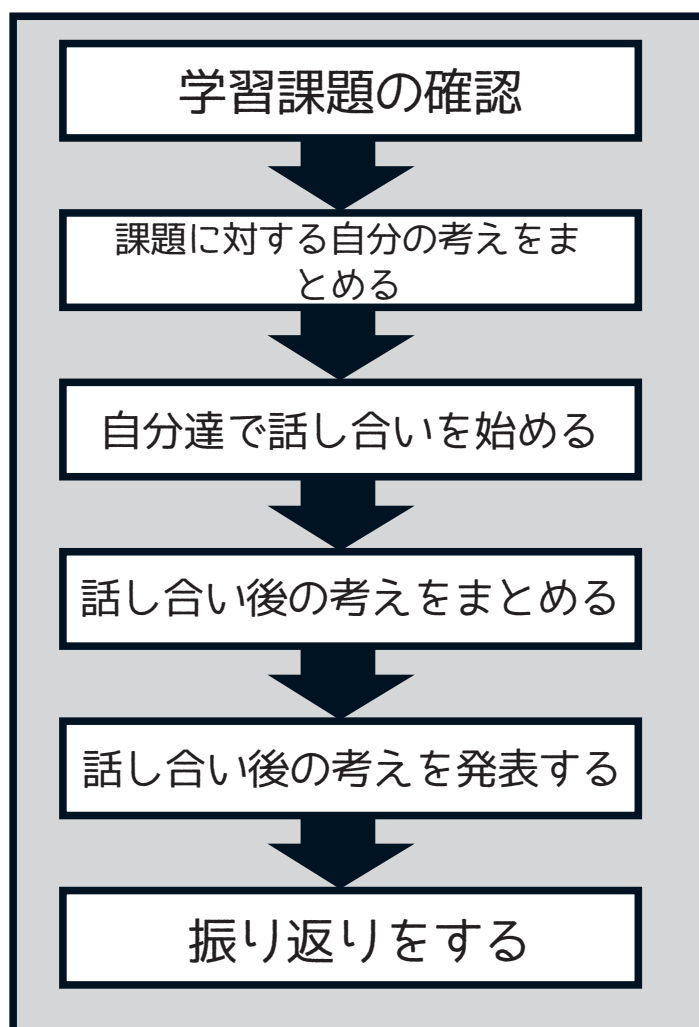
話し合いの学習過程は多様ですが、鍛えるための典型例を示しました。以下の全ての学習活動を1時間に納めるということではありません。



②

自分達で課題解決の話し合いができる集団づくり

主体的に考えを深めていく集団にするためには、子供達だけで話し合う体験も必要です。「自分達でこの課題を解決できたらすごいんだけどできるかな?」と投げかけると「うん、できるよ。」と意欲を示すことと思います。挑戦させることで話し合いの大切さを子供達が再認識します。また、教師の資料提示や論点の確認がなくても、子供達が身に付けた資質・能力と学級集団の力で、どれだけ課題を追究できるか現状を認識することもできます。



話し合いに取れる時間はあらかじめ知らせておきます。

司会役はなしで、相互指名で話し合いを進めますが、進行役は決めておき、最初の指名や次の活動に入ることを促すようにさせます。時間内で自分たちの結論を出させます。



..... 教師のまとめ（評価と振り返り）

「良かった発言」や「良かった働きかけ」を取り上げ、理由を説明して褒めます。こうすれば良かったという点についても解説します。全体的に良かった点を褒めて、またやることを確認して終了します。

③

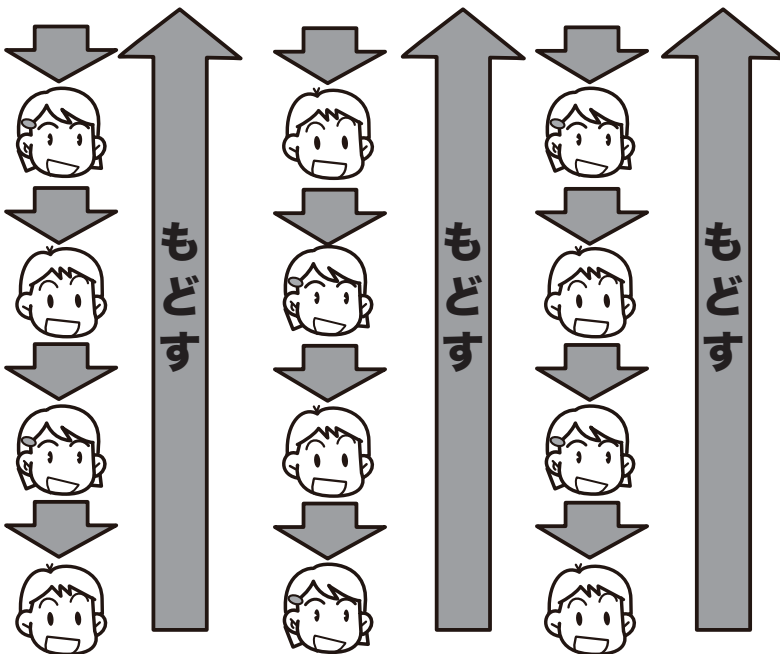
4つの話し合いの進め方

話し合いの構造について考えます。いろいろな形がありますが、「知っておくと役立つA～Dの4つの例」を挙げておきます。話し合いAは、最初に出された発言に関連する意見でつなげていく場合です。発言が出尽くしたら、課題に対する「最初の考え」に戻ります。集団が話し合いに慣れて、追究できるようになるまでは、このパターンの話し合いが多くなります。

話し合い A

最初の一つの発言から、つけたし、反対、質問等で話し合いを進めていきます。行き詰まったら、最初の課題に対する考えに話し合いを戻します。

学習課題



話し合ったことをもとにして、いろいろな角度から考え、自分の考えを形成します。

話し合いを最初に戻したとき、挙手しなくなる子供がいるので、「最初の考えだからみんなが発言できるはずですね。」などの働きかけも必要です。

「つけたしの発言」で話し合いが進みます。話し合いは深まりにくいのですが、つけたしは発言しやすいので練習になります。

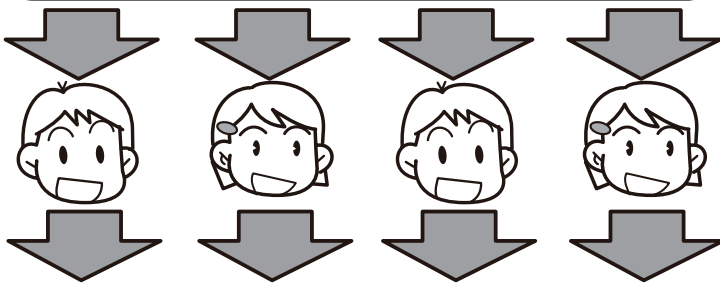
課題に対して、いろいろな角度から検討していくことができる話し合いの進め方として活用していくとよいでしょう。

話し合いBは、最初に「異なる何人かの考え」を出し合うことから、論点を作って話し合いを進めていくものです。

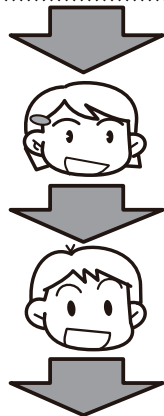
話し合い B

最初に学習課題に対する何人かの考えを出させて、その発言の中から「論点」をつくり、話し合いを進めます。

学習課題



いくつかの出された発言をもとに「論点」をつくります。



話し合ったことをもとにして、いろいろな視点から考え、自分の考えを形成します。

「織田信長について、みんなの考えを出し合いましょう」という課題があるとします。

「信長は残酷な人でいろいろな人達を苦しめた」「天下統一のもとをつくって世の中をよくしたすばらしい人」などの意見が出されたとします。

当然子供達は「どうなんだろう」という疑問を持ちます。この考え方の「ずれ」を論点にして、どんな人かについて話し合いを進めていくものです。

「ずれ」が話し合いの原動力になります。

Q 論点は子供達に作らせていくのですね？

子供達だけにこだわらず、教師が必要だと判断したら、躊躇しないで論点づくりの支援をしたほうが良いです。

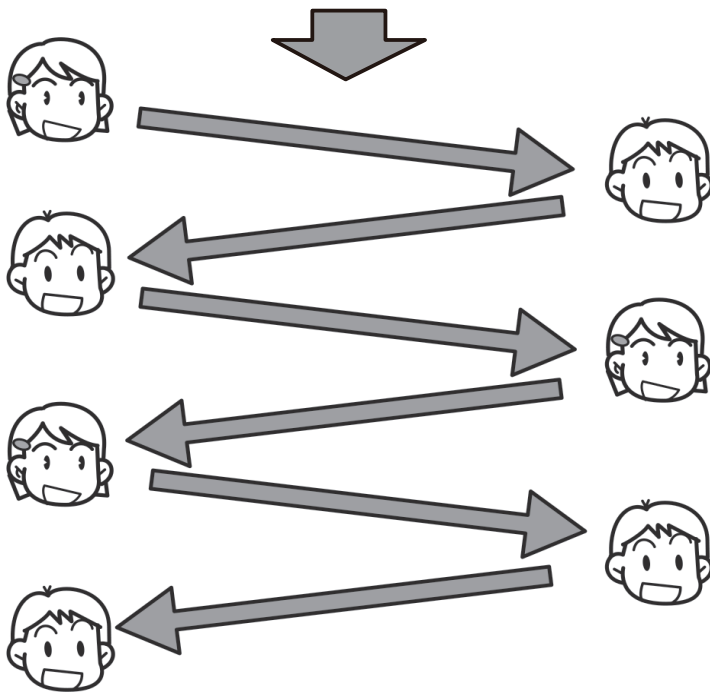
A

話し合いCは、「対立型の課題」、「二項対立」と言われるものです。矛盾するもの、正反対の考えにもそれぞれ根拠があるものです。考えの『ずれ』が話し合いの動機づけとなります。

話し合いC

対立する考え方を主に二点に集約して、どちらがいいか根拠を言い合い、多面的に考えを深めます。

学習課題



両面から考えていき、最終的に自分の考えを形成します。

例えば、「奈良の大仏を造ったことで人々は幸せになったのでしょうか」という課題です。「そう思える人」や見方・考え方の違いによって「そう思えない人」もいます。対立する考えを出し合っていくことで、視野が広がっていきます。

一方に結論づけるための話し合いではありません。多面的・多角的に思考できるようにすることが目的です。また、いろいろ考えを、自分なりに受け止め、自分の見方考え方で考えを統合して新たな知識を構成することが大切です。

Q いつも1つにまとめなくてはならないのですか？

より進んだ考え方（高い次元）で1つにまとめられることは素晴らしいことですが、常に1つにまとめることにこだわる必要はありません。

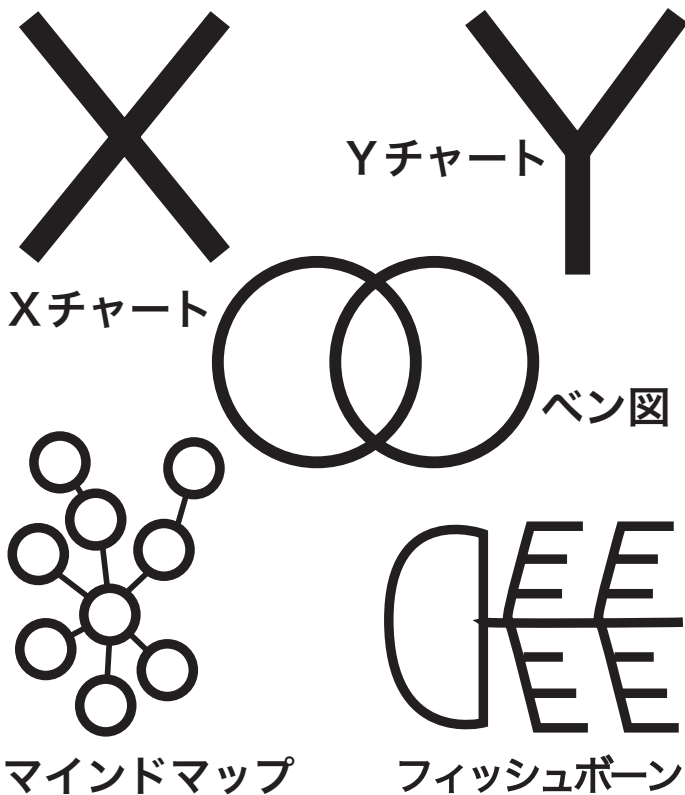
A

話し合いDは、思考ツールを活用した話し合いです。思考過程を可視化して、思考の手助けをします。活用することで効率化を図ることもできます。

話し合いD

思考ツールの活用

思考を深めるために役立つ道具として「思考ツール」があります。思考ツールは、思考することを「可視化」してくれます。



思考ツールは、つながっていなかった情報（知識）と情報（知識）をつなぎやすくする道具です。

通常の話し合いの授業では、教師が子供達の発言を板書で整理して、思考の手掛かりとして活用できるようにしていきます。

それに対して、思考ツールは、予め目的に即して用意された枠の中に考えを当てはめていきます。考えの違いや自分の考えを明確にできるとともにたいへん見やすく整理される良さがあります。



思考ツールで考えが分類された後の活動が重要です。そこから新たな概念を形成したり概念相互の関係性を見出したりすることが、思考過程では重要だからです。最終的には、思考ツールの特徴を子供が理解して、子供自身が目的に応じて活用できるようにしていきます。

4

話し合いを進めるときの
教師の働きかけ

Q 話し合いでは、どんな「教師の働きかけ」が有効なのですか？

状況次第ですが「役に立つ教師の働きかけ」を紹介します。

A

話し合いで役に立つ教師の働きかけ

「〇〇さんの発言に質問はありませんか？」

「反対意見も言いましょう。(指名する)」

(一面的に話し合いが進んでいるとき)

「反対意見も出てきました。どんどんつけたしてください。」

「分からなかったら、教わりに行ってください。自由に動いていいんですよ。」

「〇〇さん、●●さんが困っているみたいだから、助けに行ってください。」

「〇〇さん、教えるのも大切な勉強です。深く分かっているから教えられるのです。」

「〇〇さん、自信がなかったら、相談しに行ってください。」

「〇〇さんが質問したから、……が分かりましたね。素晴らしいです。」

「〇〇さんの発言で、たくさんの意見がでるようになりました。素晴らしいです。」

「今、このことについて話し合っているんですね。」

(論点をはっきりさせる)

「このことを証明する資料ありますか？」「実は先生は用意してきました。」

「〇〇さん、●●さんを教えに行ってください。助け合いが立派でした。」

「〇〇さんは、『そろそろまとめよう』と働きかけました。時間を考えて立派です。」

「〇〇さんは、うなずくとき声も出しています。自然に〇〇さんを見て話しますよね。」

見本を示すことも役に立つ方法です。

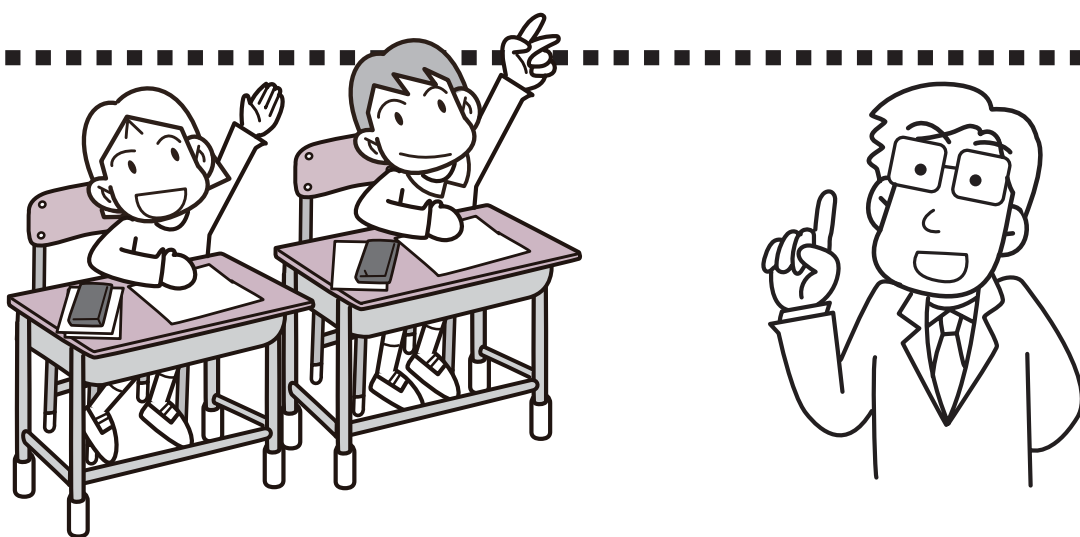
教師が子供の立場で見本を示します

■子供の立場になって挙手して、
教師が『質問』します

■子供の立場になって挙手して、
教師が『つけたし』します。

■子供の立場になって挙手して、
教師が『反対意見』を言います。

■子供の立場になって挙手して、
教師が新たな視点を発言します。



Q どうして子供の立場になって発言をするのですか？

子供に分かりやすく、真似しやすいからです。

A

5

話し合うときの教師の留意点

Q 話し合いの時の「教師の留意点」はなんですか？

下記に「教師の留意点」を例示しました

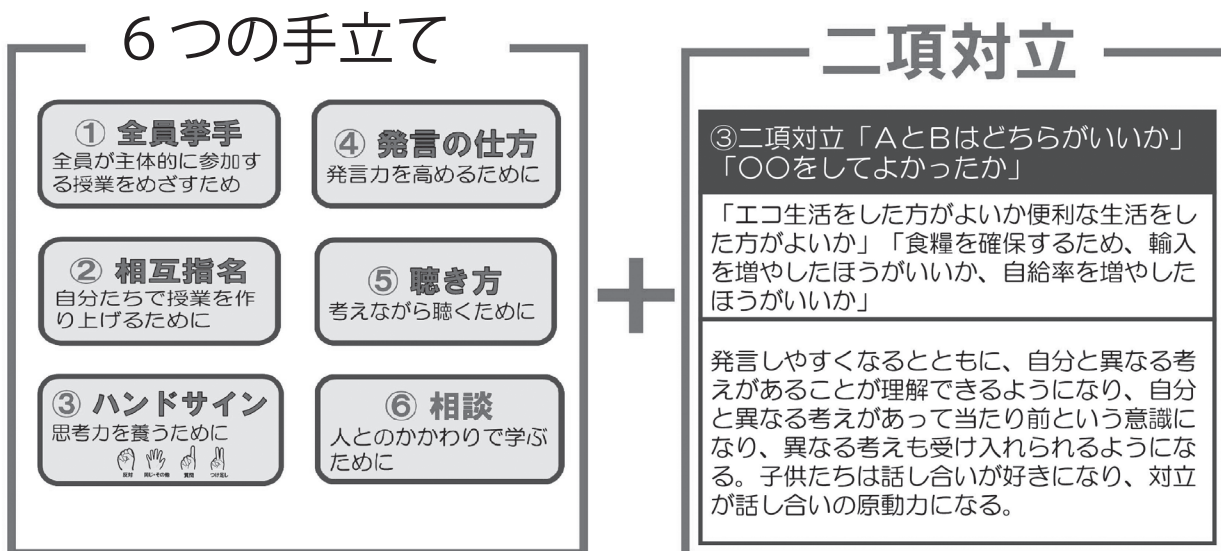
A

- ◎課題に対する「最初の考え」については、全員が手を挙げられるようにすることが大切です。一部の児童が手を挙げただけで、話し合いに入ってしまったら、深い学びは実現しません。
- 発言するときは、子供が「多くいる方向を向いて」発言することを習慣化させます。教師や黒板のほうを向いて発言しているのでは話し合いになりません。
- 黒板はみんなのノートとして、活用できるようにします。黒板、模造紙、実物投影機、実物を活用するなど、考えを分かりやすく伝える方法を身に付けることも必要です。
- ◎教師は、板書するとき以外は、できるかぎり「黒板の前に立たない」ことです。
- ◎「質問」は話し合いを深める有効な手段です。分からない言葉や意味が通らない発言には、質問させることです。「質問はないですか？」と教師から働きかけ、質問したことを褒めれば、進んで質問するようになります。
- ◎質問されて答えられないときは、だれかに代わって答えてもらえることが当たり前になります。発言できなくなったとき、「代わってもらえる」安心感は大切です。
- 話し合いのノートは、「課題」「最初の考え」「まとめ・振り返り」の記述だけでなく、キーワード、気付いた点などメモできるようになるとよいです。自分の思考過程が分かるノートしていきます。自分の判断で思考ツールを使えると活用できるノートになります。
- 常に『論点』を意識して、論点が明確になっているか判断し、必要に応じて確認や助言をします。これが学習の深まりを左右します。
- ◎「まちがい」や「ずれた発言」をばかにしたり、非難したりすることがあったら、授業を止めて、厳しく注意します。
- ◎ときどき「間違ってもいい」「分からないから勉強している」と確認して、安心して発言できる受容的な雰囲気づくりを意識します。発言が苦手な子供の発言は、前の発言と同じ内容でも認めて賞賛します。先生が否定しなければ、安心して発言できるようになります。

⑥

6つの手立てで十二項対立の課題

これで話し合いができる集団に！



「①～⑥までの具体的な手立て」と「二項対立の課題」を活用すると、話し合いが成立する集団の基盤ができます。課題は、対立ばかりだと飽きてしまうので、その時々で工夫が必要です。根気よく続けることが『こつ』です。

これで話し合いの準備はOKです。これから話し合いを始めますが、以下の4点は意識しておきましょう。

話し合い(活用)の授業を始める時の留意点

活用の授業(話し合い)と習得の授業を区別する

単元を通して、習得と活用のバランスを考える

鍛える段階では1日に1回は話し合いの授業をする

話し合いで時間を使うが、後に効率的に授業が進められるようになるので、安心して取り組むことが大切

5

主体的・対話的で深い学び

ここでは、「深い学び」と考えられるものを3通り例示しました。これが絶対的なものであったり、これ以外には深い学びはなかったりするということではありません。

①「キーワードを作り概念を形成する」

話し合いで、発言をつなげていき概念を形成していく過程で、共通の発言に着目してキーワードをつくり、それを使って課題に対する概念を形成する。

②「多様な考えを出し合い、みんなが納得できる共通の考えを作り出す」

話し合いで出される多様な考えを生かしながら、みんなが納得できる課題に対する共通の概念を形成する。

③「話し合いで自分なりの新たな知識を構成する」

話し合いで出された多様な考えを自分の見方・考え方で受け止めて、課題に対する自分なりの知識を構成する。

これらの学習が実現すれば、これからの時代に求められている資質・能力を育成することが期待できます。



1

3つの深い学び

Q 主体的・対話的で深い学びを「深い学び」にするには、どうすればよいのですか？

特定の学習形態を取り入れれば、深い学びになるということはありません。

A

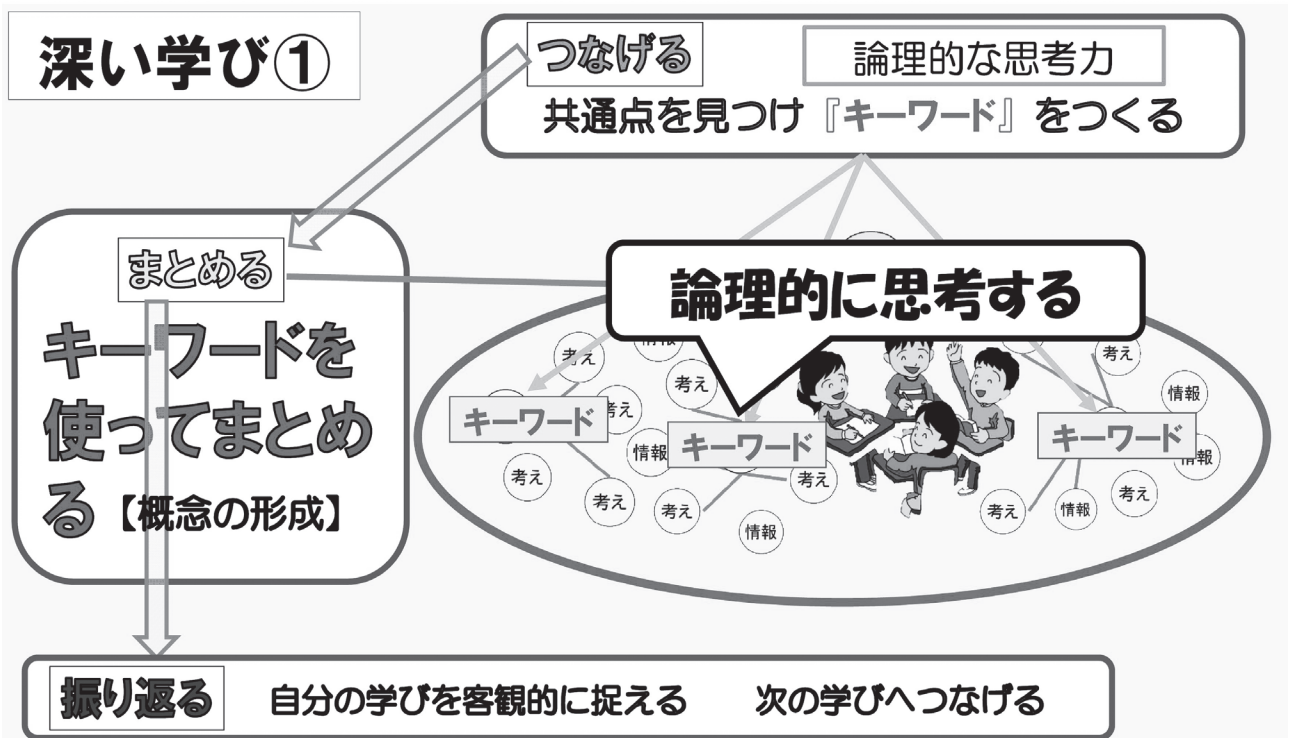
3つの深い学び

- ① キーワードを作り概念を形成する
- ② 多様な考えを出し合い、みんな納得できる共通の考えを作り出す
- ③ 自分なりの新たな知識を構成する

どんなことができるようにすれば「深い学び」と言えるのかという視点から「3つの深い学び」を考えました。

①の「キーワードを作り概念を形成する」は、いろいろな発言の共通点に着目してキーワードを作り、それを使って課題に対する考えをまとめる（概念を形成する）学習です。

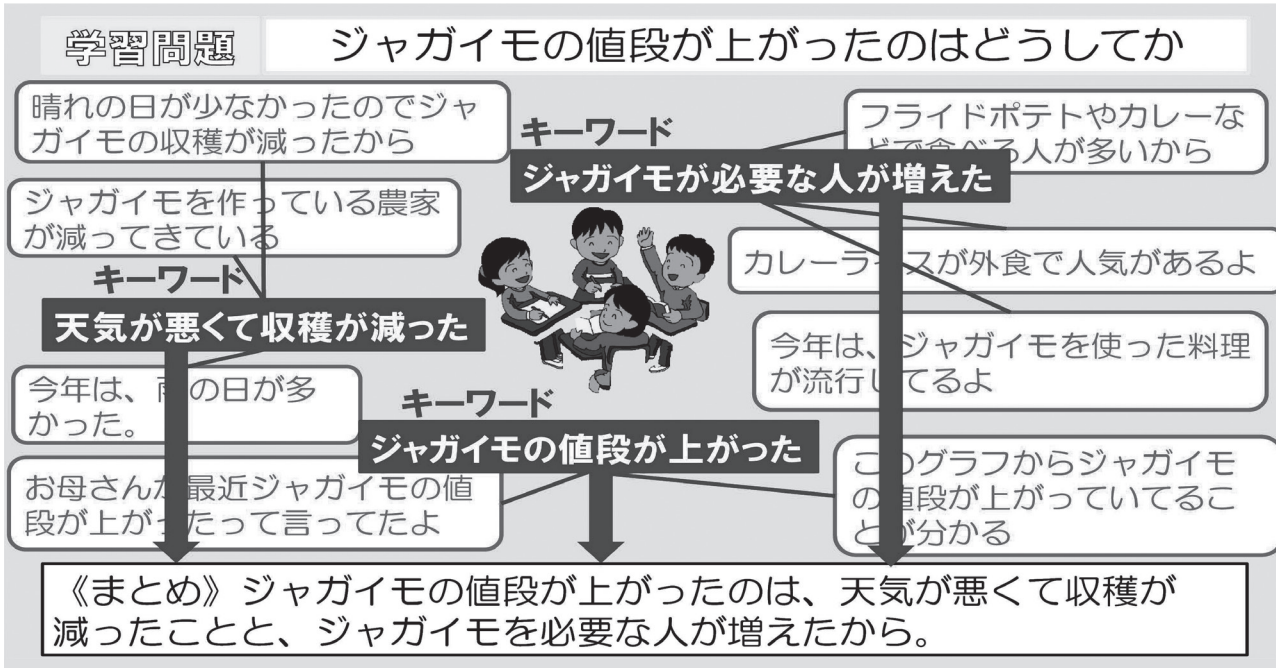
A



Q キーワードというのは、どんなものですか？

下の図では「天気が悪くて収穫が減った」「ジャガイモが必要な人が増えた」「ジャガイモの値段が上がった」がキーワードです。子供たちが作れない時は、教師主導で作ります。

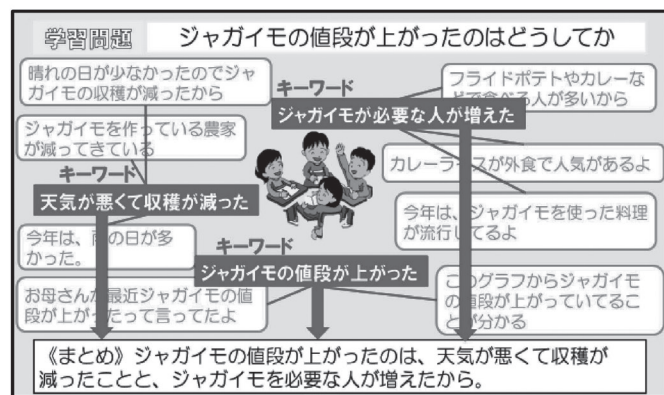
A



このキーワードを全部使って、子供たちは課題に対する考えをまとめます。

A

Q これをまとめて終わりでしょうか？



概念化された知識
 ほしい人が多く、商品が少ないとき値段は上がる
 ほしい人が少なく、商品が多いとき値段は下がる
 (需要) (供給) (価格)

概念化と学習

生活で汎用的に活用

授業で汎用的に活用

テレビの販売価格は時間がたつと下がってくる理由は？

内容によっては、まとめた言葉をさらに抽象化し「概念化された知識」にして、他の場面でも活用できるようにします。

概念化された知識「ほしい人が多く、商品が少ないときは値段が上がる」を、例えば「テレビの価格の推移」に当てはめられるか考える学習をして、汎用的に活用する能力を養うことも考えられます。

A

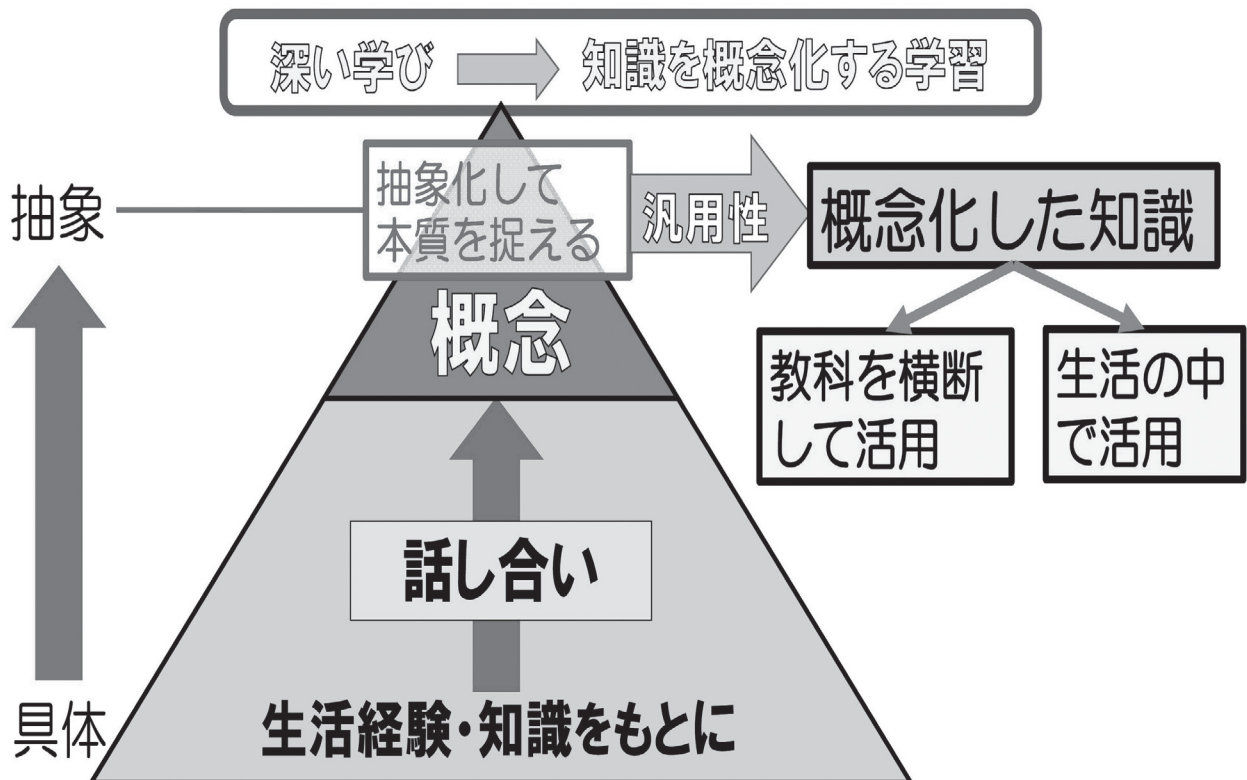
Q 評価にも使えますね。

先ほどの「ほしい人が多く商品が少ないときは値段が上がる」を「自分の生活に当てはめて説明しましょう」と記述する評価の場面を設定することも考えられます。

A

Q 自分が学習で身に付けたものを、いろいろな場面に当てはめて汎用的に活用する方法ですね。

これからの時代に求められる資質・能力

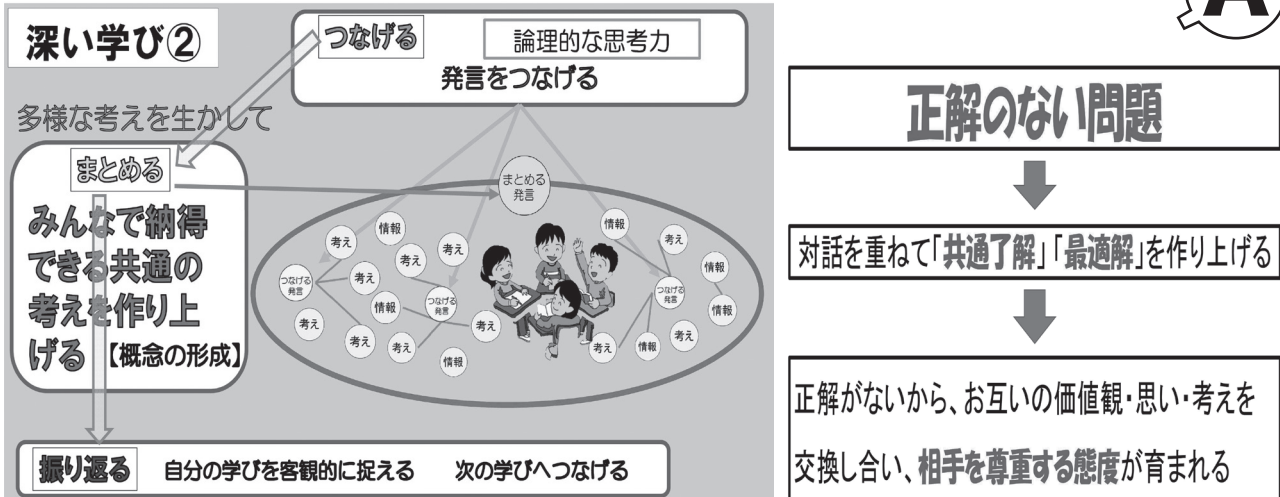


このような手立てで養えるのは、「概念化能力」と言われるものです。自分のスキルの抽象度を上げ、別の分野でも汎用的に活用する能力です。いろいろな仕事に就いても活躍できることが期待できます。

A

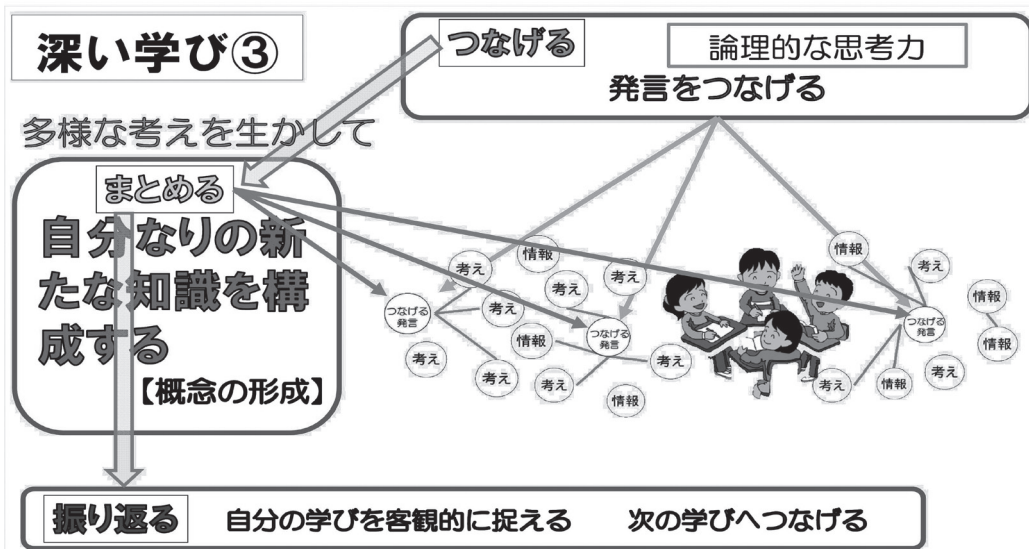
②は「多様な考えを出し合い、みんなが納得できる共通の考えを作り出す」ものです。人には経験や環境に基づく多様な見方・考え方があり、それらを出し合って、互いの考えを尊重し合い、折り合いをつけ、よりよい考えを作り上げていくことを学びます。グローバル化社会でも活躍できる資質・能力を養います。

A



特別活動の話し合いだけでなく、授業の話し合いでも、みんなが「納得できる共通の考え」を作り上げる経験を積み重ねることが大切です。

③は、話し合いで「自分なりの新たな知識を構成する」ものです。



Q ①や②とどこがちがうのでしょうか？

話し合いを通して、課題に対する考えを作り出すことは同じですが、「自分なりの見方・考え方に基づいて」新たな知識を構成するところが異なります。

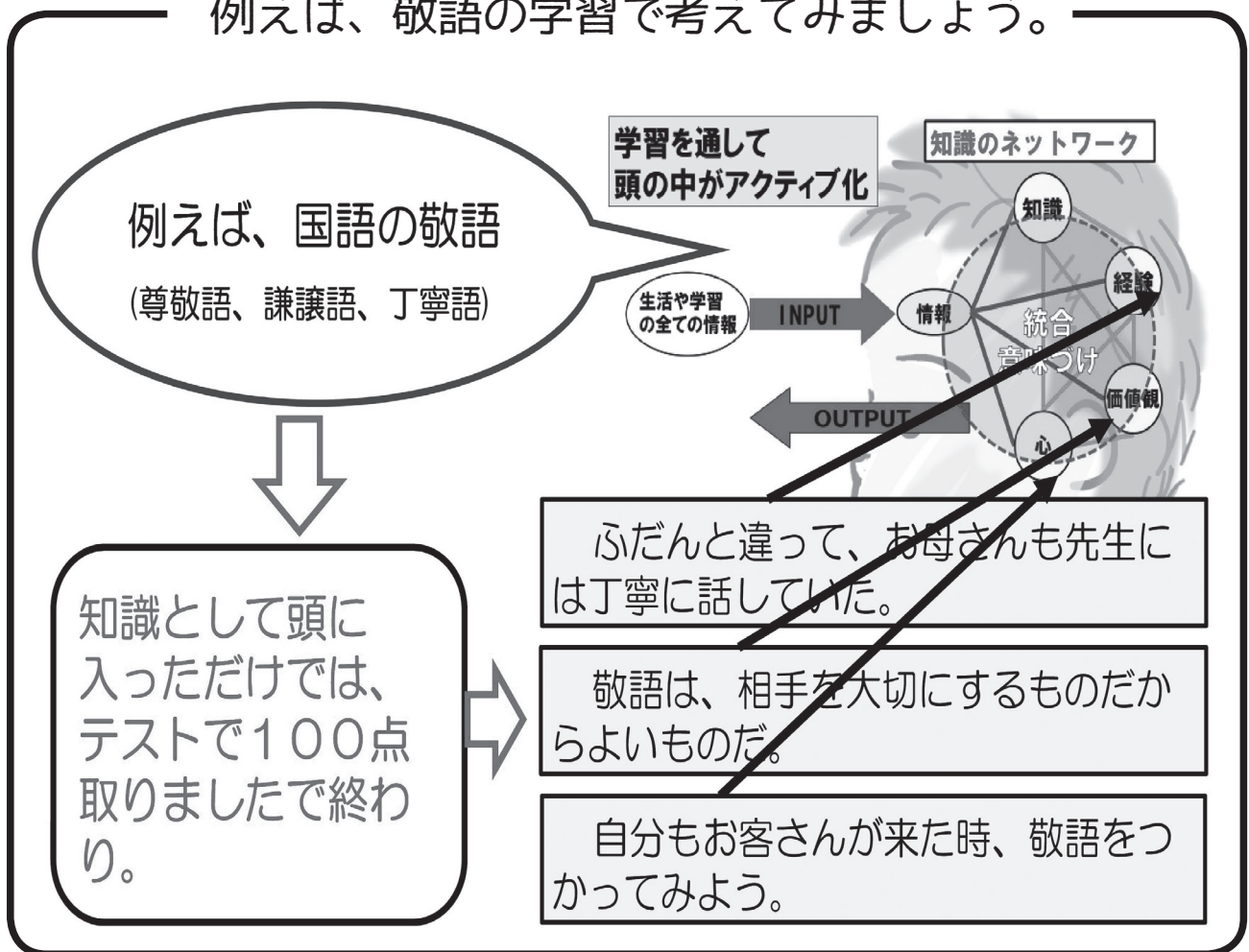
A

Q 自分なりの「知識を構成する」という意味が分かりませんか？

一人一人の子供は、異なる環境や文化の中で見方・考え方を獲得しながら成長しています。その異なる見方・考え方を活用して対象にかかわっていくので、獲得される知識も一人一人に違いがあるということです。

A

例えば、敬語の学習で考えてみましょう。



上記の例は、敬語の学習で学んだことを、自分の経験や価値観、生活と結び付けて、敬語について「自分なりの知識を構成」します。こうして、敬語を自分のものとして、自分の生活や生き方に役立てていくことを可能にします。

このことは、新たなものを生み出す「創造力」を養うことにつながります。創造したものを価値あるものにするイノベーションにつながる学習も期待できます。

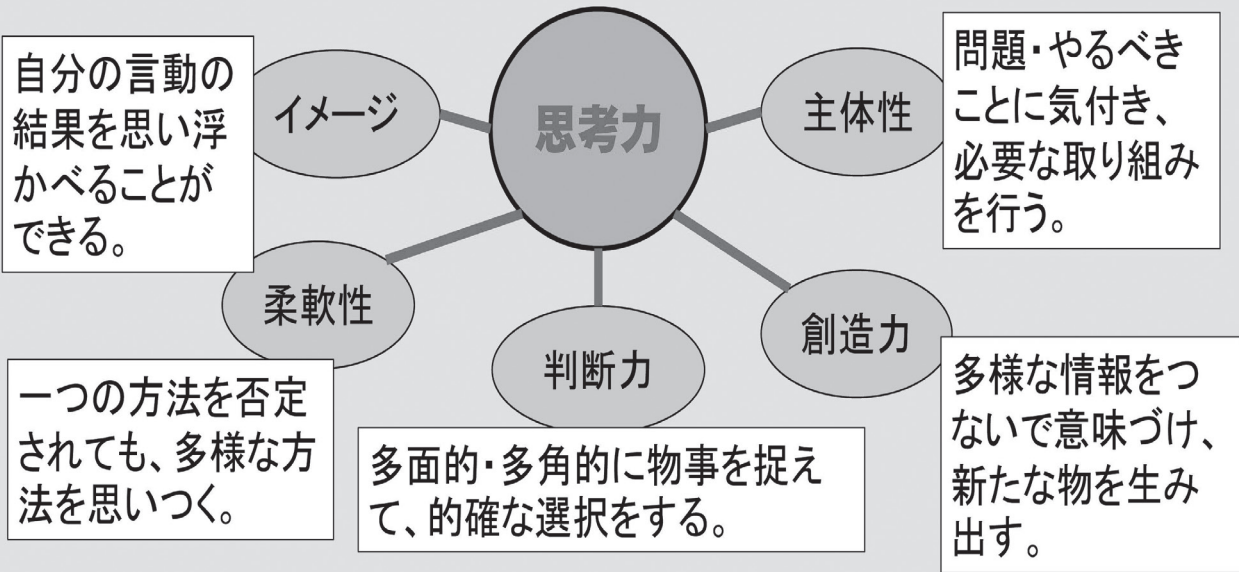
A

②

論理的な思考力の大切さ

深い学びについて説明してきましたが、すべての学習に必要な力は「思考力」です。

汎用的な能力は『思考力』が基盤



※ 知識は大切ですが「知識は過去のもの、思考は未来に向かうもの」という言葉も意義があります。

Q 論理的に思考しているとは、どんな時ですか？

子供の発言で例示すると、以下のものが該当します。

A

演繹的に思考していると判断できる

- Aは、中心から円周までの長さがぜんぶ同じだから円と言えます。
- ↓
- Bも、中心から円周までの長さがぜんぶ同じだから円と言えます。
- ↓
- Cも、中心から円周までの長さがぜんぶ同じだから円と言えます。

帰納的に思考していると判断できる

- この三角形の三つの角をたすと 180 度になります。
- ↓
- つけたしで、もう一つの三角形も 180 度になります。
- ↓
- つけたしで、この三角形も 180 度になります。
- ↓
- ということは、どの三角形も三つの角をたすと 180 度になるんだ。

3

論理的な思考力とは

論理的な思考力は、汎用的な能力の最も重要な要素です。子供が論理的に思考できているか判断するには、教師が「論理的思考」を理解しておく必要があります。

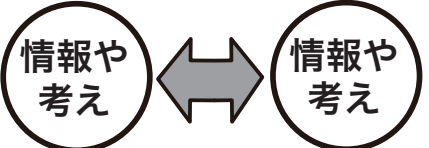
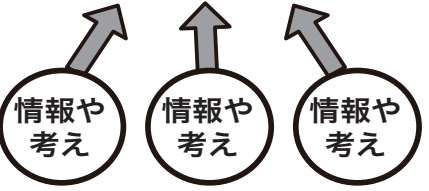

Q 演繹とか帰納とか、思考方法を覚えるのですか。

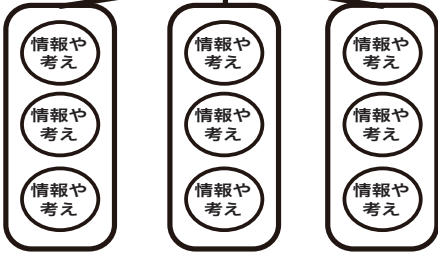
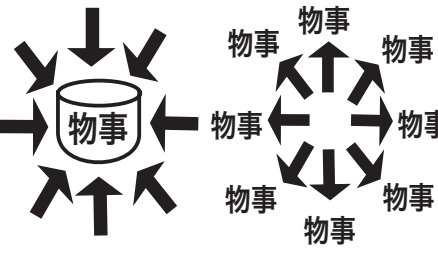

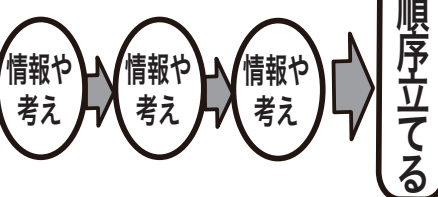
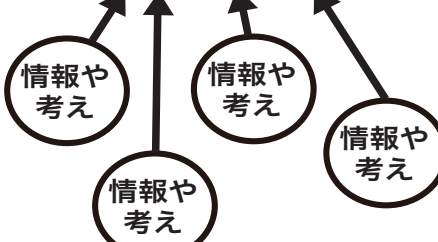
発言につながりがない言いつ放しは、ただの発表で思考していることにはなりません。「発言による情報」を比較・関連させて、共通点を見出し、概念を形成していくものが、論理的思考のある話し合いです。

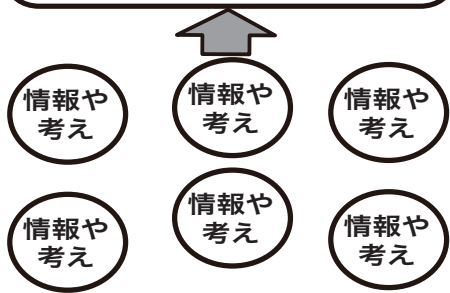


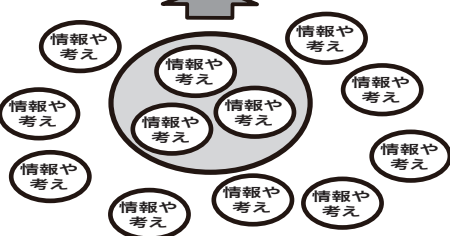
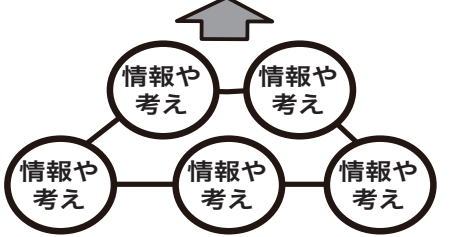
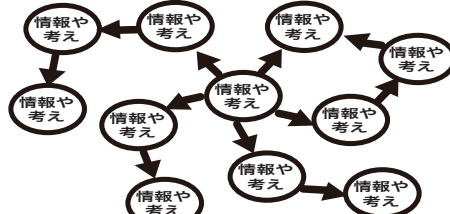
思考方法の名前をすべて覚える必要はないと思います。以下の例を理解しておくで、話し合いで「論理的に思考」できているかどうか判断できるようになります。

A

育てたい論理的な思考力

<p>比較 (思考の始まり)</p>	<p>【比較】</p>
	<p>情報や考えを比べて、違いや共通点を見つける。 他の人の発言と自分の考えを比べる。</p> <hr/> <p>同じです。つけたしです。反対です。質問です。</p>
<p>きまり・法則・共通性</p>	<p>【帰納】</p>
	<p>情報や考えの関係をとらえて、そこにあるきまりや法則を見つける。</p> <hr/> <p>A、B、Cから～ということが言えます (分かります)。</p>
<p>きまり・法則・共通性</p>	<p>【演繹】</p>
	<p>情報や考えを、きまりや規則に当てはめる。</p> <hr/> <p>A、B、Cには、○○というきまりや法則が当てはまります。</p>

<p style="text-align: center;">分類する</p> 	<p style="text-align: center;">【分類】</p> <p>情報や考えを、観点や視点を決めて、グループに分けていく。</p> <hr style="border-top: 1px dashed black;"/> <p>これまで出た意見は、三つのグループに分けられます。こういうふうにと考えると、全部で4つのグループにも分けられます。</p>
<p style="text-align: center;">多面的・多角的な見方</p> 	<p style="text-align: center;">【多面的・多角的】</p> <p>いろいろな面から見たり、いろいろな方向から見たりして、物事をとらえる。固定的な見方にとらわれない。</p> <hr style="border-top: 1px dashed black;"/> <p>見方を変えるとこういうことも言えます。別の見方があります。見方によって、いろいろ考えられます。</p>
	<p style="text-align: center;">【推論】</p> <p>情報や考えの関係をとらえて、そこから先を予測する。</p> <hr style="border-top: 1px dashed black;"/> <p>これらのことから、次はこうなると思います。</p>
	<p style="text-align: center;">【順序立て】</p> <p>情報や考えを、観点や視点を決めて、グループに分けていく。</p> <hr style="border-top: 1px dashed black;"/> <p>このような順番になります。なぜなら～だからです。</p>
<p style="text-align: center;">抽象化</p> 	<p style="text-align: center;">【抽象化】</p> <p>関連している情報や考えを、共通点に着目して、一つの言葉(キーワード)でまとめる。</p> <hr style="border-top: 1px dashed black;"/> <p>これらをまとめて一言で表すと○○○と言えます。これらはまとめて、○○○と題名をつけられます。</p>

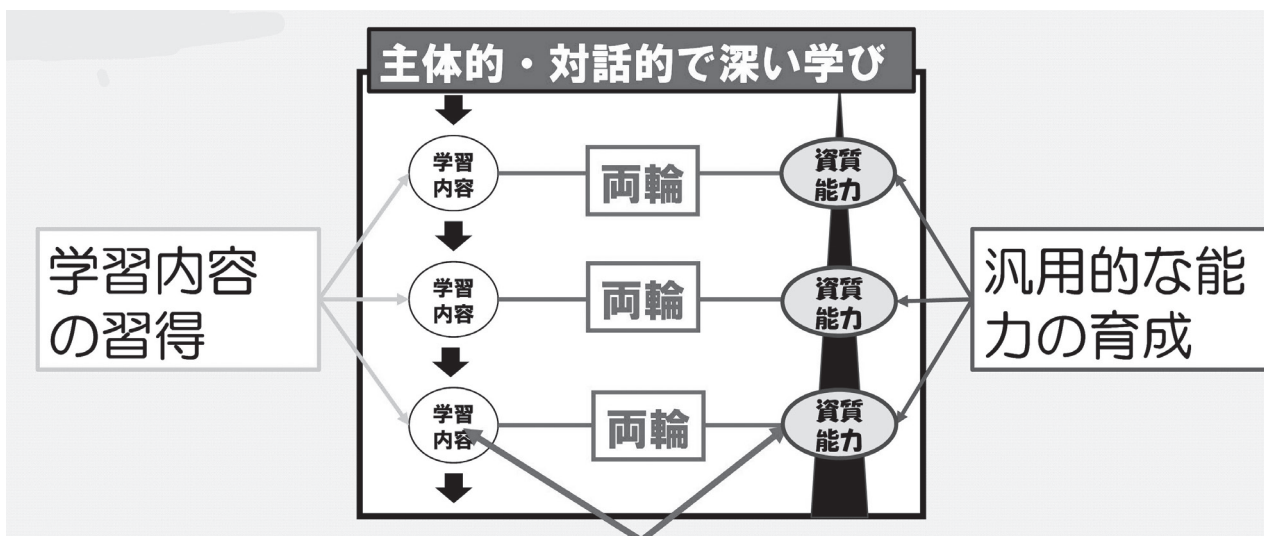
<p style="text-align: center;">絵・図簡単な言葉</p> 	<p style="text-align: center;">【置き換える】</p> <p>情報や考えを、より簡単な絵や図、ことばに置き換えて表す。</p> <hr style="border-top: 1px dashed black;"/> <p>これらは、絵(図)に表すと、分かりやすくなってこうなります。これらは簡単な言葉で表すと○ ○と言えます。</p>
<p style="text-align: center;">関連付ける</p> 	<p style="text-align: center;">【関連付け】</p> <p>情報や考えの関係性をとらえて、つなげていく。</p> <hr style="border-top: 1px dashed black;"/> <p>AとBはつながりがあります。 なぜなら～だからです。</p>
<p style="text-align: center;">短い言葉・概念</p> 	<p style="text-align: center;">【概念形成】</p> <p>多くの情報や考えを、グループにまとめて、題名・見出しをつける。</p> <hr style="border-top: 1px dashed black;"/> <p>A B C D E F Gはひとつにまとめられます。題名をつけると○○○になります。</p>
<p style="text-align: center;">視点をきめて集点化する</p> 	<p style="text-align: center;">【焦点化】</p> <p>見方や考え方を決めて、中心になる発言や情報を選ぶ。</p> <hr style="border-top: 1px dashed black;"/> <p>A B C D E F Gはひとつにまとめられます。題名をつけると○○○になります。</p>
<p style="text-align: center;">新しいもの・新しい考え</p> 	<p style="text-align: center;">【創造】</p> <p>多様な情報と情報をつなぎ合わせて、これまでになかった新しいものをつくり出す。</p> <hr style="border-top: 1px dashed black;"/> <p>A B Cの発言から～という新しい方法を思いつきました。</p>
<p style="text-align: center;">関連性から広げていく</p> 	<p style="text-align: center;">【関連性】</p> <p>情報や考えのつながりを広げていく。</p> <hr style="border-top: 1px dashed black;"/> <p>○○は、Aに関連していると思います。○○はBにつながると思います。理由は～だからです。</p>

<p>要約する・単純化する</p> 	<p>【要約・単純化】</p> <p>多くの情報や考えを、わかりやすくしていく。</p> <p>-----</p> <p>かんたんな言葉で表すと、○○と言えます。短い言葉で言い換える(表す)と、～となります。</p>
<p>応用・新たな問題の解決</p>  <p>これまでに身に付けた 知識・技能</p>	<p>【応用】</p> <p>これまでに身に付けた力を生かして、新たな問題を解決する。</p> <p>-----</p> <p>これまでに習ったAとBのやり方を使うと、新しい○○の問題が解けました。</p>
<p>予想の結果・イメージ</p>  <p>手立て</p>	<p>【予想】</p> <p>このような手立てをとると、このような結果になるだろうとより具体的にイメージする。</p> <p>-----</p> <p>こういうやり方をすると、このような結果になると思います。</p>
<p>評価(選択して価値付け)</p> 	<p>【評価・価値づけ】</p> <p>目的に応じて、多くの情報や考えの中から、必要性や重要性を判断して選んでいく。</p> <p>-----</p> <p>AとBとCは、～だから大切だと思います。</p>
<p>概念化・構造化・統合</p> 	<p>【概念化・構造化・統合】</p> <p>まとめの段階で、これまでに出示された情報や考えを、大きなまとまりに分けて、短い言葉で表す。まとまり相互の筋道や関係性をとらえる。</p> <p>-----</p> <p>これらはこのような大きなまとまりに分けられます。このまとまりにはAという名前をつけられます。このまとまりにはBという名前をつけられます。AとBは、～の関係があります。</p>

4

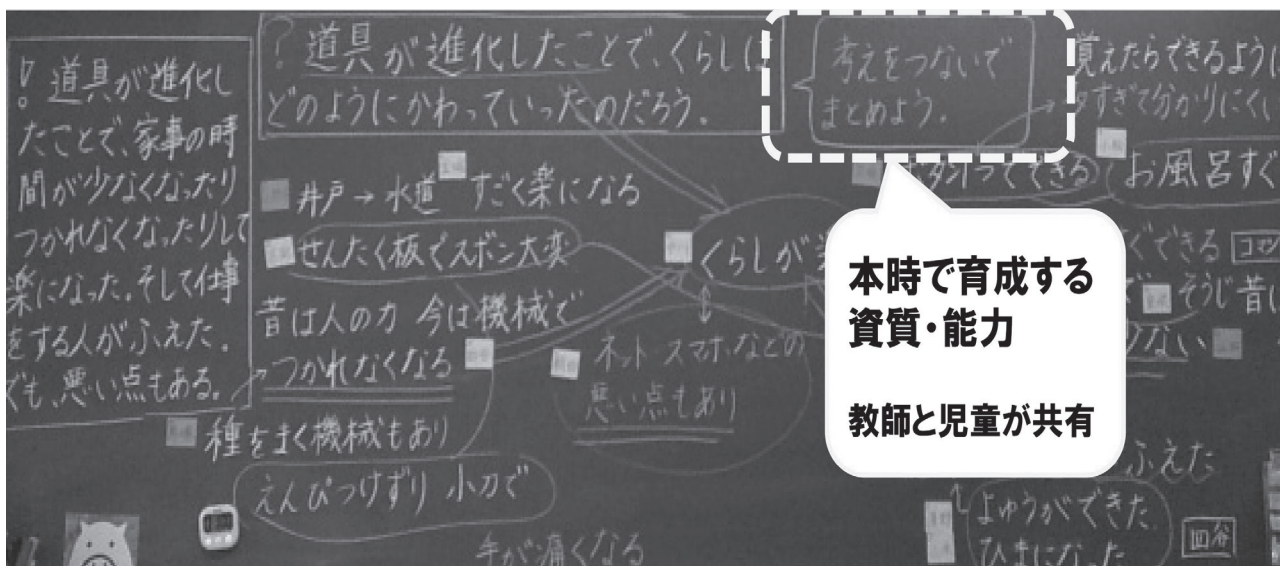
資質・能力の育成を大切にした授業

資質・能力を育成する授業にするには、下のように「学習内容の習得」と「資質・能力の育成」の両面を意識することが必要です。



1時間ごとに『学習内容の習得』と『汎用的な資質・能力の育成』

Q 子供には、資質・能力について、どう伝えるのでしょうか？



学習の初めに、授業で育てたい資質・能力を、「学習課題と共に子供が理解できる言葉で提示」します。

学習の終わりに、資質・能力を意識して学習できたか「子供と振り返りをする」と効果的です。

5

育成する資質・能力とは

Q どのような資質・能力を育成すれば良いのですか？

資質・能力の三つの柱が新学習指導要領に示されています。それをもとに、これからの時代を生きる子ども達に必要な資質・能力を定めます。

A

Q 具体的にはどんなものがあるのですか？

例えば、以下のように18項目設定することも考えられます。これを学年ごとに具体化して、汎用的な資質・能力育成計画表を作成するのです。

A

資質・能力の3つの柱	番号	学校教育全体を通して育成する汎用的な資質・能力
生きて働く知識・技能の習得	1	進んで挙手して主体的に学習活動に参加して、知識や技能を確実に習得していく力
	2	分からないこと・知らないことを恥ずかしがらず、自分から質問したり、助けを求めたりして、主体的に知識や技能を習得していく力
	3	教え合い、助けあい、支え合いながら、人とかかわりを通して知識や技能を習得していく力
	4	新たに獲得した知識や技能を既存の知識や技能と関連付けたり組み合わせたりしながら、学習活動や生活の場面で積極的に活用していく力
未知の状況にも対応できる思考力・表現力・判断力等の育成	5	考えを深めるために多面的・多角的・折り合いをつけながら問題解決に向けて話し合う態度
	6	発言内容と発言内容の関連性を捉え、そこから共通点や法則を見いだしたり、法則を適用したりして、論理的に思考していく力 【比較・関連・帰納・演繹・両面思考・類推・抽象作用・概念形成等】
	7	話し合いで出された多様な発言を大きくまとめて、まとまり相互の関連性を意味づけるなどして統合していく力
	8	話し合いを通して統合されたみんなの考えを、自分の知識や経験、価値観と結びつけ、心で受け止めて、自分なりの新たな知識を構成する力
	9	問題の発見や解決に必要な情報を収集して、整理・分析して、目的に応じたまとめ方をして、自分の考えの根拠として活用しながら表現する力
	10	学習問題の解決や自分の目的の達成のために、思考ソールの有効性と特徴を理解し、有効に活用する態度
	11	多様な情報や考え方をつないで、自分なりに意味づけたり新たな知識を構成したりして、創造したことを、生活や生き方に役立てられるような価値あるものにしていく態度 (イノベーションの能力)
	12	ICT(情報通信技術)の有効性と特徴を知り、課題追究の学習において、積極的に活用して、自分の考えを深めていく力
学びを人生や社会に生かそうとする学びに向かう力・人間性等の涵養	13	学ぶこと・働くこと・生きることの尊さを実感し、学ぶ意欲を持つ
	14	共生・協働の精神をもち、共生社会を実現していく力
	15	心のよりどころとしてのふるさと郷土に愛着を持つ
	16	思いやりや優しさを優先して、教え合い・助け合い・支え合い、人とかかわる良さを感じ取りながら、主体的・協働的な学習ができる力
	17	生活や学習では、みんなでよくなることで自分もよくなることにつながるという価値観のもとに、助け合ったり教え合ったりして、自らの生活や学び方をよりよくしていく態度
	18	学習を通して学んだ人とのよりよいかかわり方を、自分の全ての生活で実践して、自分の考え方に生かしたり、自分の生き方に取り入れれたりしていく態度

さらに具体化して、P.60のように毎時間の授業で「本時で養いたい資質・能力」を子供と共有して学習に取り組みます。そうして18項目の資質・能力の育成を積み重ねます。

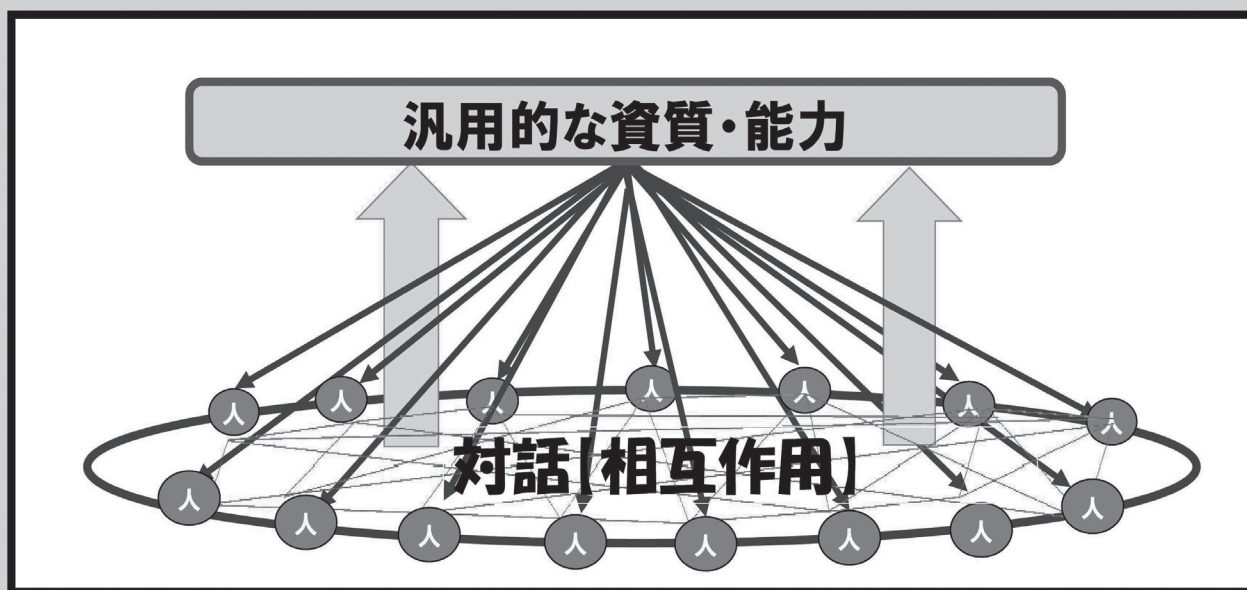
A

⑥

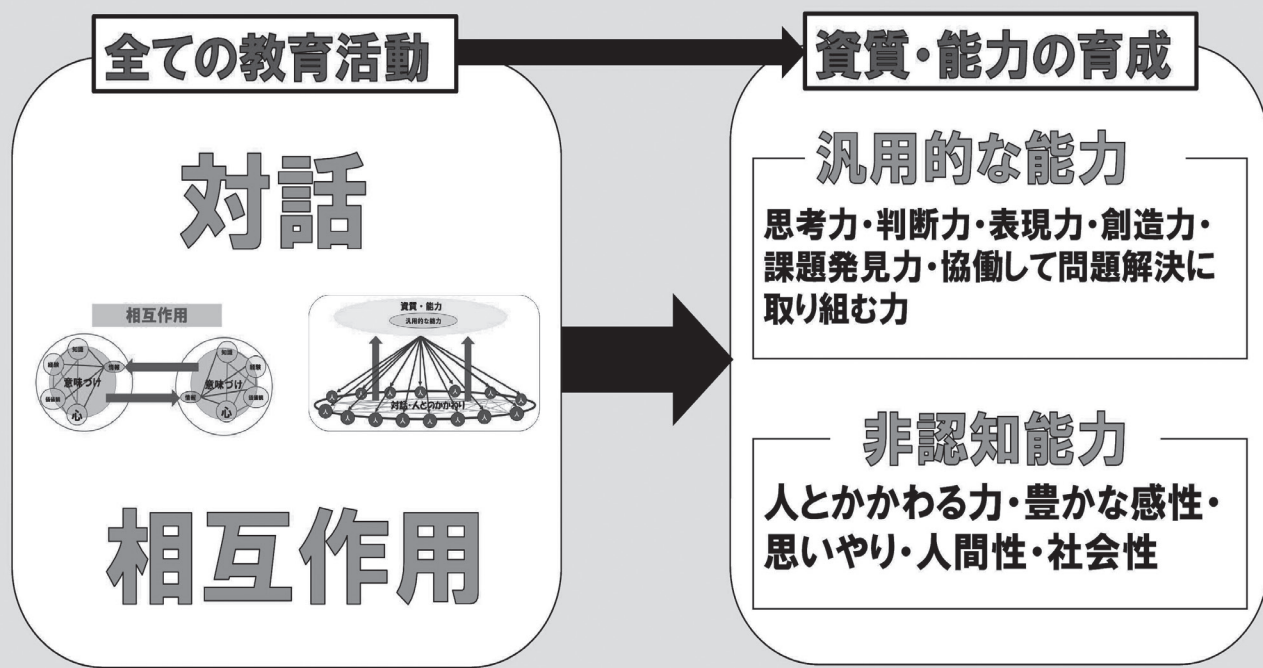
『対話』と『相互作用』を大切にした授業

課題追究の過程では『対話』と『相互作用』を活性化させることで、主体的・対話的で深い学びが成立して、「思考力・判断力・表現力等の認知的な能力」と「社会スキル、人間性等の非認知的な能力」の資質・能力の育成が可能になります。

主体的・対話的で深い学び



主体的・対話的で深い学び



7

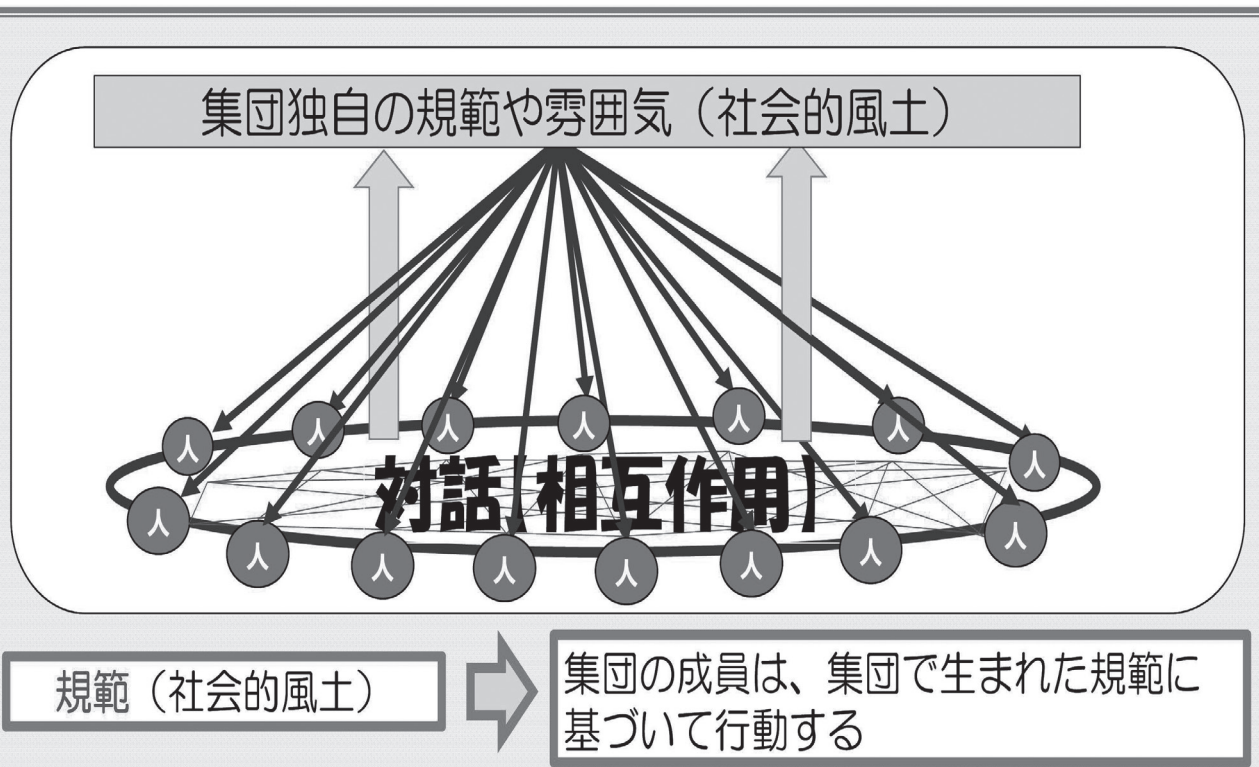
対話と相互作用を大切にした集団づくり

Q 「授業」でも「学級の生活」でも『対話』と『相互作用』は大切だと思えるのですが？

そうです。「授業」と「学級の生活」を別々に捉えるのではなく、共通性を捉えて『対話』と『相互作用』を活性化させていくことで相乗効果が出ます。集団によりよい規範や社会的な風土が定着し、よりよい人間関係が作られて、深い学びが成立するようになります。

A

集団の雰囲気は 目標・リーダーシップ・成員の相互作用次第



一人一人には、個人差・能力差・考え方の違いなどがあります。みんなで取り組むことでも、できる子、できない子が出てきます。

できない子を受け入れ、その子に応じた働きかけができる受容的な集団づくりをしていくことで、『対話』と『相互作用』が活性化して、深い学びが成立するようになります。

6

単元をつくる

新学習指導要領では、これからの時代に求められる資質・能力を育成することに重点が置かれます。これは、1時間の授業がうまくできたからといって実現できるものではありません。

毎日・毎時間の授業を通して育成することで可能になります。したがって、これからの教師は「資質・能力を育成する単元構成」の力をつけることが必要です。

そのためには、「知識・技能を習得する授業」、「知識・技能を活用して思考力等の汎用的な能力を養う授業」を単元の中にバランス良く取り入れることが大切です。

また、生きて働く概念化された知識を獲得できるようにするために、実生活や実社会に関連させながら単元の学習が展開できるようにすることも必要です。

思考力をはじめとする汎用的な能力を養うためには、単元相互の関連性や各教科等との関連を意識しながら単元を構成する力をつけることが大切です。



①

単元をつくる

Q 概念化された「生きて働く知識」とは、どんな知識ですか？

「転移・応用できて汎用的に活用できる知識」のことです。

これからは、自分で単元を作る力が重要になります。深い学びを実現するためには、子供の知識や生活経験を生かした学習を展開し、概念化された「生きて働く知識」を獲得できるようにする学習過程が不可欠だからです。

A

単元等のまとまりを見通した学びの実現

単元の導入	単元の展開		単元のまとめ
児童の実生活や実社会とのつながりを意識した学習の展開			
児童の経験 や知識と教材をつなぐ	習得の授業	活用の授業	構成の授業
	学習指導要領の内容		新たな知識の構成
	全員拳手を基本にする	話し合いで考えを上げ深める	話し合いで考えを上げ深める

- ①主体的・対話的で深い学びは、1単位時間で全てが実現されるものでない
- ②単元のまとまりの中で、振り返る場面、対話する場面をどこに設定するか
- ③子どもが考える場面と教師が教える場面をどのように組み立てるか

知識や技能を「習得する学習」と習得した知識やもともとある知識を「活用する学習」のバランスを考えて単元を作ることは、資質・能力の育成には不可欠です。

資質・能力を育成する学習では、単元で学んだことが、教科横断的な視点で、他の単元や教科等でも活用できるように関連性を図ることが大切です。

7

3つの視点からの集団づくり

これまではどのような手立てで、「主体的・対話的で深い学び」をめざすかということでしたが、それらの基盤となるのは「学級集団」です。学級集団がよい方向に機能していけば、学校生活が充実して深い学びも可能になります。そのために集団をどのようにしていくことが望ましいのか考えていきたいと思います。

集団をよりよく機能させていくために、以下の3つの視点からの集団づくりを説明していきます。

- ①全員が参加して主体的に学べる集団づくり
- ②話し合いで主体的に考えを深めていく集団づくり
- ③規範がありだれでも安心して過ごせる集団づくり

人の成長は、環境に大きく左右されます。子供達にとって学級集団は、強い影響力のある環境です。3つの視点からの集団づくりを定着させることで、学習の基盤となる「教科の枠を超えた汎用的な能力」を養うことができます。

また、よい集団はよい子を育てます。そのよい子がよりよい集団をつくり、さらによりよい子に育っていくという好循環をめざすことができます。そして将来、よりよい大人となって、よりよい社会を形成していくことができるようになるのだと思います。このような好循環をつくっていくことも教育の大切な役割だと思います。

①

3つの視点からの集団づくりとは

主体的・対話的で深い学びを通して資質・能力を育成するためには、全員が受け入れられて主体的・協働的に学べる集団が成立していなければなりません。集団をどのように育てていくかという視点がたいへん重要です。

以下の3つの視点からの集団づくりが「教科の枠を超えた汎用的な能力」の育成を可能にします。この「積み重ね」が、これからの時代に必要な資質・能力の育成を成功させます。

3つの視点からの集団づくり

全員が参加して
主体的に学べる
集団

話し合いで主体
的に考えを深め
ていく集団

規範がありだれ
でも安心して過
ごせる集団

共通性と一貫性のある取組

これまで説明してきた「対話と相互作用を活性化させる授業」と「3つの視点からの集団づくり」を、学校として「共通性と一貫性」のある取組として実践できれば、資質・能力を育成する教育は実現します。



②

全員が参加して主体的に学べる集団

全員参加の目的や手立ては、すでに説明しました。ここでは、それを集団にどのように浸透させていくかです。

全員が参加して主体的に学べる集団

進んで教わる
進んで教える
助け合う
気軽に話せる

人とのかかわり方
人とかかわること
の大切さを学ぶ

学習内容の
確実な習得

全員参加は「みんなでよくなる」ため

Q これからの時代に求められる資質・能力を養うことと集団づくりは、どう関係するのですか？

集団における「対話」と「相互作用」のある学びが、思考力等の汎用的な能力（これからの時代に求められる資質・能力）の育成を可能にします。

A

Q どうすれば「対話」と「相互作用」のある学びになるのですか？

「対話」と「相互作用」のある学びができる集団にするためには、一人一人が集団で行う「対話」と「相互作用」のかかわりの中入ることができなければなりません。そこで、全員が参加して主体的に学べる集団づくりが必要になるのです。

A

③

話し合いで主体的に考えを 深めていく集団

子供一人一人の「個人的な生活の場面に即した多様な考え」を気軽に発言できる「受容的な集団」が、話し合いで主体的に考えを深めていく集団づくりの基盤になります。

Q

どうしてそうなるのですか？

実生活に即した多様な考えが出される「対話」と「相互作用」が活性化している話し合いを通して、課題に対する概念を形成していくことで、実生活や実社会において活用できる概念化された知識を身に付けることができるからです。

A

話し合いで主体的に考えを深めていく集団

対話・相互作用
学習課題の追究

多様な考え
立場の違い
理解して認め合う

思考力 判断力
表現力 創造力
人とかかわる力

汎用的な資質・能力の育成

一人の仲間はずれもなく、人とのかわりかわりで協働的に学ぶことが自然にできる集団で、多様な考えが出され、それらをまとめて一つの概念を形成していく過程で、相手を理解し認め合う態度も育成されてきます。そのような経験が積み重ねられる集団になることが、話し合いで主体的に考えを深めていく集団づくりにつながるのです。

4

規範がありだれでも安心して 過ごせる集団

集団生活をしていると、子供たちの中には「トラブル」が起きます。これらを「学習における課題」と同様に捉えて、学級の全員で話し合っ
て「これからどうすることが望ましいのか」考えることを積み重ねると、
実生活に即した「学級の規範」がつくられていきます。

先生が当事者を呼んで指導しているだけでは、もぐらたたきのように
次から次へと問題が起こってきます。集団生活の良さがなくなって、マ
イナス面が大きくなってしまいます。

子供が問題に気付いた時は、すぐに問題を提起して、解決に向けた「話
し合いの場」が設けられている学級の仕組みが必要です。「どうせ言っ
ても無駄」というような形骸化した話し合いにならないように留意する
ことも大切です。

規範がありだれでも安心して過ごせる集団

生活上の問題は
みんなの問題
話し合いで解決

相手を思っ
てあたたか
い注意

注意されたら
素直に受け入
れありがとう
と感謝

問題を解決し
て、毎日気持
ちよく家に帰
れる

個人差が受け入れられ、みんながのびのび過ごせる

生活の問題解決の話し合いを積み重ねていくことで、学級の規範を作り、ど
の子も差別されたり仲間はずれにされたりしない、安心して過ごせる集団づ
くりができます。

8

個性が輝く集団づくり

学習を「深い学び」にする授業実践の方法を中心に記述してきましたが、最も大切なのは「誰のための教育」なのかということです。「一部の子だけが活躍している深い学び」よりは、「浅くてもより多くの子が活躍できる学び」に価値があると考えられる教師であるべきです。一部の子だけが活躍する授業は、できる子の狭い範囲の知識や考えで授業が決まってしまいます。そして、多くの子はやる気をなくしていきます。そこには、多面性や多様性、発展性は期待できません。

長い目で見ると、より多くの子が活躍できる学びを追究してきた教師は、子供たち一人一人を着実に育てているので、最終的に「より深い学び」に到達できます。「一人も見捨てられない集団」をつくることによって、全員が「対話」と「相互作用」の人とのかかわりの中に入って成長しているからです。

「個性が輝く学級・学校づくり」というすてきな言葉がありますが、どんな子も認め・受け入れられて、伸ばしてくれる学級や学校の集団をつくるということです。『特に配慮を要する子』も「対話」と「相互作用」のつながりの中に入れて、人とのかかわりの中で成長できるようにしなければなりません。問題を起こしている子を「厄介な子」と思うのではなく「その子はそうすることでしか自分を守れなくなっている。」私（教師）が守ってあげようという強い気持ちを持ち「集団に受け入れられる」働きかけを続けて「人とのかかわり」で学んでいける子に育てていくことです。先生の「一人も見捨てない」「みんなを大切にしている」本気の姿勢が子供達に浸透します。そして「いじめ」「不登校」「学級崩壊」の問題で悩むことはなくなります。

①

生活の問題解決の話し合い

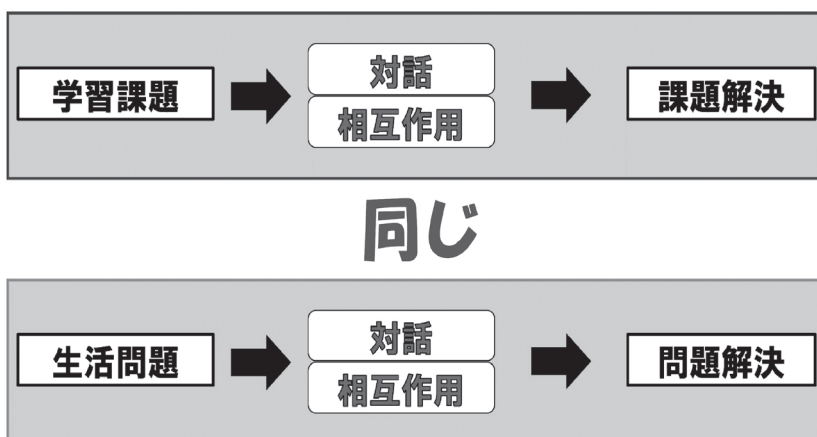
子供たちには、性格・環境・好き嫌い・能力などの個人差があります。学校の集団生活では一緒に物事に取り組んだり遊んだりするので、生活上の問題が起こります。問題解決のための話し合いをすることが、人とのかわり方や生き方等の非認知的な能力を育成することにつながります。

生活上の問題解決の話し合いは、学習の課題解決と同じで、対話と相互作用により解決していきます。一人一人が自分のこととして切実に考え、話し合いで解決することで、学級の規範もできてきます。



生活上の問題をどうすれば解決できるか、みんなで良い方法を考え出し合う過程は、学習課題に対して概念を形成していくことと同じですね。

学習課題と生活問題の話し合いは同じ



そうです。生活上の問題も学習の問題も、解決方法に対話と相互作用で見出していくのは同じです。みんなで問題を共有して、考えるからこそ、問題解決につながるのです。

A



問題が起こったとき、当事者だけ指導して終わってしまうのでは、みんなの学びにならないということですか？

当事者だけの指導では、その後も「もぐらたたき」のように繰り返すことになります。また、問題がさらに悪化していくことも考えられます。

A

Q どんな問題が起こったとき、みんなで話し合うとよいのですか？

基本的には「個別のプライベートの問題」か「共通している問題」かが基準です。但し、いずれ全体に影響与えると思えることは、全体に取り上げておくことも必要です。状況に応じた先生の的確な判断が求められます。

話し合いは「Aが良いBが悪い」と決めることが目的ではありません。みんなが納得して、よりよくなれるという視点を大切にすることです。生活上の問題は日常起こるので、子どもが問題に気づいたとき、『子供から問題提起』して「解決する場」が必要です。いつでも全員で話し合っ解決できる場を、学級につくっておきます。

A

- ①『毎日の問題の解決の場』を設定します。
【帰りの会でもよいです。】
- ②児童から解決の場に、問題提起できるようにします。
- ③問題提起や問題解決の方法を学ばせます。
- ④問題を持ち越さないで、すっきりして家に帰れるようにします。

「どうせ言っても無駄」などと話し合いが形骸化してしまったり、「話し合いで言ってやる！」など脅迫の場になったりすると、まったく意味のない話し合いの場になってしまいます。この話し合いには、必ず教師も関わり、ていねいに積み重ねていくことが必要です。



自分たちの生活上の問題を、解決に向けて話し合い、解決のための具体的な方法がとれるようになることをめざします。これは、授業と同様に、対話と相互作用を活性化させていく、人のかかわりが大切なのです。このようにして身に付けた資質・能力は、大人になったとき、自分たちでよりよい社会を形成していく力になります。

2

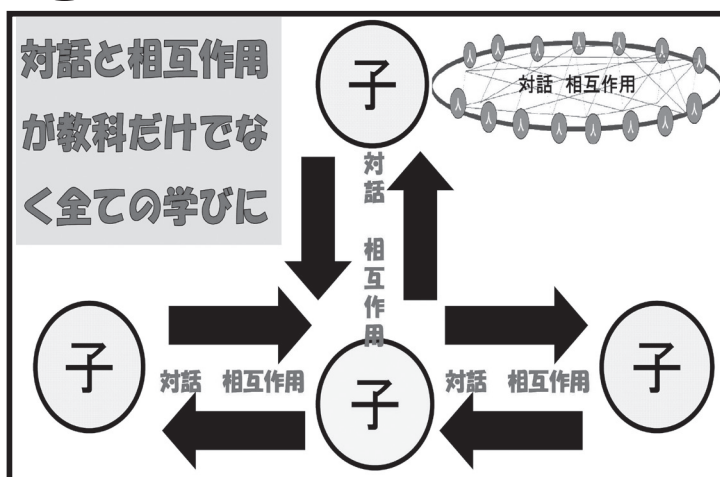
個性が輝く集団づくり

Q 「個性が輝く集団」とは、どんな集団ですか？

学力差・能力差・考え方の違い等の個人差を集団が認めて受け入れ、周囲がその子に応じた働きかけをして伸ばすことができる集団のことです。

A

Q 学習とのかかわりもあるのですか？



全ての学びが対話と相互作用の人とのかかわりで学ぶことで効果が出ます。対話と相互作用の授業も同様です。その子なりの見方・考え方が自由に出されることで活性化します。そのためには、集団が全ての子を受け入れられるものになっていなければなりません。

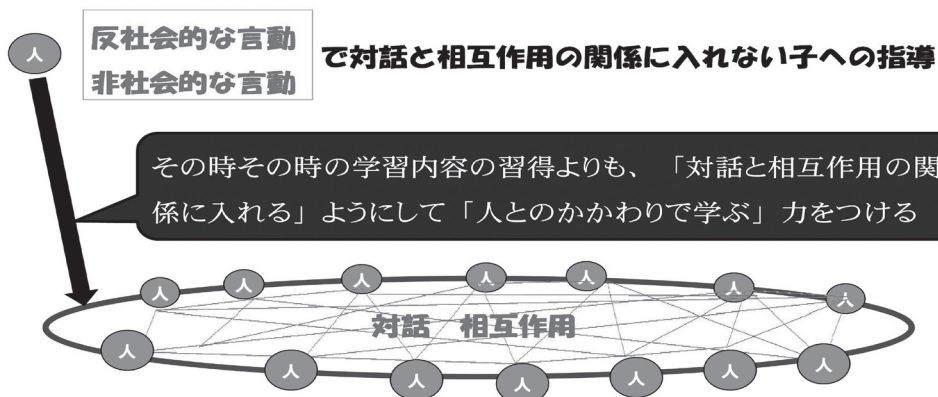
A

Q 具体的に何をすればよいのですか？

対話と相互作用のかかわりの中に入れられない子に着目して、その子が集団の中に受け入れられ、人とのかかわりで成長できるようにしていくことです。

A

対話と相互作用の中に入れられない子



実現のための手立てとして、生活で起こる問題は、みんなで話し合っ
て解決し、集団をよりよく機能できるようにすることです。

もう一つは、かわりが持てない子を、集団に受け入れられるように
教師が根気よく努力をすることです。一人も見捨てない姿勢が子供達に
伝わって、受容的であたたかい集団になっていきます。

トラブルを起こす子や指示されたことができない子を、教師も周囲の
子も責めるのではなく、原因を探って、その子にとってよい働きかけを
することです。

Q 実際にどうすればよいのですか？

以下の手立ても効果的です。参考にしてください。

A

厄介な子にしない！

担任の対話・相互作用の関係に入れたい子への対応

- 1**
- ①共通の話題(趣味など)を作り会話する(理解して・関係を作る)
 - ②一緒に遊ぶ(他の子との関係を作りながら遊ぶ)
 - ③その子を好きになる(困り感に共感・守る)

- 2**
- ①保護者とこまめに連絡をとって人間関係を築く
(良いところ・課題を伝えるとともに、理解者であることが伝わるように)

- 3**
- トラブルなどがあつたときは、全員の問題として、みんなで考え、
受け入れられるようにしていく。(一人も見捨てない姿勢を見せる)

これができる教師は、 いじめ・不登校・学級崩壊の問題は起こしません

特別に配慮を要する子に対して「ひいき」するということではありません。この子がよくなっていく過程で、級友も多様な人とのかわり方を身に付けていくことになります。そして、みんなが認めて受け入れてくれる集団の中で「個性を輝かせ」成長していくのです。

A

9

質問コーナー

話し合いの授業を取り入れると、授業の進度が遅れるのですか？

習得の授業は短時間で多くの学習内容を習得でき、話し合いの授業は時間がかかるというイメージがあります。当然話し合いの授業を始めたばかりは、時間がかかりすぎる状況になります。しかし、話し合いに慣れてくると、効率的に進められます。また、集中力・思考力も高まり、より短時間で多くの内容を習得できるようになります。学習内容によって時間の軽重をつけることが大切です。

すべての授業を話し合いにした方がよいですか？

学習指導要領には、学ばなければならない多くの学習内容があります。全ての授業を話し合いにすることは時間的に困難です。内容からも「習得」させる基本的な知識・技能が多い場合は、話し合いは効率的ではありません。積極的に話し合いを取り入れて鍛えていくことも必要ですが、内容と時間から考えて効率的に習得させることも必要です。

学習課題は、子供に作らせた方がよいですか？

自分達で学習課題を作れるようになることはめざすべきです。しかし、学習の流れや内容によっては、教師が課題を与えたほうがよいときがあります。課題を作らせることにこだわり過ぎて、時間がかかり過ぎてしまえば、追究の時間が不足してしまいます。「今日の学習課題のこういうところが良かったから、話し合いが深まったね。」などと、少しずつ良い課題を意識させていくことが大切です。

子供たちが話し合いの最後に考えをまとめられないときは？

子供達が自分達で「課題に対する考えをまとめていく」ことはとても難しいことなので、最初は教師主導でまとめていく体験を積み重ね、まとめ方を教えていくことが必要です。

但し、課題に対して教師が期待するまとめの言葉を、子供から無理に引き出すような授業では、資質・能力の育成はできません。単なる教え込みの授業と変わりません。まとめの結果として作り上げる言葉（概念）を優先するよりも、その過程でどんな学びができているのか、資質・能力の育成を重視しながら、根気よく話し合いの授業に取り組むことです。課題に対する考えをまとめる力が必ずついてきます。

なぜ、発言を「つなぐ」ことが大切なのですか？

情報(知識)と情報(知識)をつないで意味付けしていくことが思考そのものです。級友の発言と自分の考えを対比することは、比較・関連する思考となります。そこから、演繹的な思考・帰納的な思考など、様々な思考が始まります。

ディベートは有効ですか？

話し合いの仕方を学ぶ手段としてはたいへん役に立ちます。しかし、授業で求めるものは、話し合いの仕方や根拠の作り方だけでなく、学習内容を子供が主体的に受け止め、価値判断したり認識を深めたりして、自分の生活や生き方に役立てることです。対立する考えとの勝ち負けを求めるものではありません。ディベートのメリット・デメリットを理解して効果的に活用することです。

話し合いの授業の評価はどうするのですか？

子供が主体的に話し合う授業では、教師が子供の様子をじっくり観察できるようになります。対話を通して「概念化された知識が獲得されているか」、「思考力等の汎用的な能力が身に付いてきたか」、「人とのかわり方で主体的に学ぶことができるか」、授業における観察で評価を積み重ねることができます。また、単元の学習過程で、知識が習得されたかワークシートやノートに記述させて評価することもできます。思考力等についても同様の方法でできます。ワークシートに記入させてファイリングし、ポートフォリオ的に活用していくことも有効です。

なぜ、自由に相談させるのですか？

相談することで、自分の考えの拠り所ができて、安心して発言できるようになるからです。みんなが助け合って良くなっていくという意識を持たせることにもつながります。気軽に級友に相談できる雰囲気をつくっておき、「立ち歩いて聴きに行ったり教えに行ったり」することができるようにしておきます。分からないままじっとしては何も始まりません。

授業に集中していない子がいるときは、どうすればよいのですか？

授業を進めることを優先するのではなく、授業を止め、集中できない子の前に行き、注意することです。特に、年度当初は、集中させることを優先しなければなりません。「ちょっとぐらい」とか「あの子は仕方がない」で見過ごしてしまつては、集中できない子が増えてきて、クラスがざわついてきます。これが積み重なつてくると、学級崩壊にもつながってしまいます。年度当初は、学習を進めることより、集中させることを優先することです。



教師の秘伝 ホームページ

ご質問等で問い合わせたいときは、「教師の秘伝のホームページ」があります。メールを送信できるようになっていますので、私の分かる範囲で応えていきたいと思っています。「教師の秘伝」で検索するとすぐに見つかることと思います。

教師の秘伝


よしあら かずゆき


吉新一之




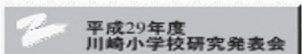
『新・教師の秘伝』を作成しました。
新・教師の秘伝は、主体的・対話的で深い学びを実現する具体的な手立てを示しています。
左の表紙をクリックしてご覧ください。

※クリックすると、内容の一部が見られます。

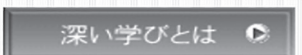
 教師の秘伝 1は、全員が挙手して主体的に学習に参加する集団づくりを目指すための手立てです。

 教師の秘伝 2は、全員で話し合い、いろいろな考えがあることを理解しながら考えを深めていく集団づくりを目指す手立てです。

 教師の秘伝 3は、生活の問題を全員で話し合い、学級の規範を作り、だれもが安心して過ごせる集団づくりを目指す手立てです。

 平成29年度
川崎小学校研究発表会

平成30年1月26日の川崎小学校の研究発表会でのプレゼンです。

 深い学びとは ▶

対話と相互作用を通して概念化された知識を獲得し、汎用的に活用できる能力を育成することを目指します。

主体的・対話的で深い学びは、対話と相互作用を通し協働して学ぶことで、これからの時代に必要な資質・能力を育成していくことが目的です。児童生徒の多様な価値観や生活経験に基づく考えを出し合うことで、一人一人の考えに広がりや深まりが出てきます。また、人とかかわることの良さも体験したり、実社会や実生活で役立てることができる概念的な知識を身に付けることもできるようになります。その前提になるのは、どの子も差別されず安心して過ごせる学級集団がつくられることです。学校として「共通性と一貫性」のある組織的な取組を実現することで、児童・生徒に資質・能力を育成することが可能になります。

教師の秘伝を活用してのご感想やご質問等がありましたら、ご連絡ください。教育関係者の方で、教師の秘伝が必要な場合はご連絡ください。何かご要望等もありましたら、下の封筒をクリックして、メールでお知らせください。



Copyright ©2016 kyoushinohiden All Rights Reserved.

終わりに…

「継続は力なり」です。教師の秘伝にあることを根気よく取り組んでいくと、主体的・対話的で深い学びの実現に確実に近づくことができるはずです。

一人も見捨てることなく、みんなで良くなることが大切という雰囲気をつくり、「対話」と「相互作用」を「充実」させる授業をめざすことが成功への「鍵」となります。

繰り返しになりますが、どの子も受け入れられ、本来持っている力を発揮できるようになると、集団の力が大きくなり、学習の広がりや深まりが見られるようになります。また、その基盤となる生活面が充実してきます。

子供達は先生次第です。先生のすることをよく見ています。私たち教師にとって大切なのは、指導の技術や理論以上に、人としての教師の姿です。「一人も見捨てない」先生の姿勢を、子供達に伝えることです。そのことが、良い教育が良い社会をつくっていくことにつながります。そして、教師が自分の仕事に誇りを持てるようになるのです。

新・教師の秘伝

●著作

吉新 一之

●表紙・本文デザイン

瀧山サチヨ

平成 30 年 1 月 26 日第 1 刷発行

平成 30 年 4 月 1 日第 2 刷発行

平成 31 年 4 月 1 日第 3 刷発行

